

289

289-Su22-27



1200500732453

菅江眞澄



柳田國男



始



80

289  
Su 22  
2



柳田國男著

眞澄

創  
元  
社



919  
247

## 序

菅江眞澄に就て私の書いたものは、大正九年に公表した「還らざりし人」が、秋風帖に出て居るのを最初にして、雪國の春には「眞澄遊覽記を読む」、民謡覺書には「民謡と越後」があり、更に退讀書歴の中には「霜夜談」の間はず語りがあつた。もうこの翁に對して私の抱いて居る感懐は、説き盡したといつてもよいのである。其上に二十年來の望みであつた彼の身元生ひ立ち、どうして此様な大きな旅をすることになつたかといふ、隠れた動機はまだ少しも明かになつて居ない。新たに一つの本をこしらへる理由は無いわけである。たゞ強ひて言ふならば東北の人たちに、もうちつと彼の業績を利用させたいことゝ、あはよくばさういふ機會に於



て、何か私たちの知り得なかつた事が、わかつて來はすまいかといふ未練もまじつて居る。とにかくに事情がもし許すならば、ざつとした年譜を作つて置きたいといふ、夙くからの計畫が是で果されるので、二三の古い文章を附載したのも、目的は單にどういふ人だつたかを説明する爲で、一つの傳記を整へたといふやうな氣持は、自分には無いのである。今までの經驗では、百五十年來の舊家も東北には存外残つて居る。たとへば陸中六日入の鈴木氏などでは、當主長雄翁はちやんと白井秀雄の名を記憶して居て、すぐに曾祖父の日記を取出して、來た還つたとある個條を見せてくれた。家も其頃のまゝで焼けもせず改造もしない。とまれれば此室だつたといふ佛壇のある中で、私も茶を飲んで昔の話を聞いたのである。さうかと思ふとその近くの、徳岡の村上家は朝鮮に行き、姉體の安彦家は今は無く、又山ノ目の大槻家も取崩されたまゝになつて居る。百何十年の前の

暮しぶりを知るといふことが、知友縁故者の深い關心を惹くであらうことは、盛衰何れの場合でも同じで、たゞ喜んでさういふ話に耳を傾けることの出来る家が、或はもう一度古い書きものや手紙類を、探して見てくれることになるだらうと思つて居る。さういふ豫想のもとに、年譜には成るだけ多くの村里の名、又家と人との名を掲げて置くことにした。實地に就て見たら私の讀みちがへ、もしくは初めからの筆者の誤りも出て來るだらうと思ふが、それとても今は好話柄である。何等のまとまつた姿も無い概念の「過去」を談ずることに、御互ひはやゝ倦みかゝつて居る。さうして我真澄翁の書き留めた昔の生活だけには、鮮かな色彩があり、又波うつ血潮の音が聽えるからである。

昭和十七年二月

柳 田 國 男

目次

序

白井秀雄と其著述……………一

秋田縣と菅江眞澄……………四五

信州と菅江眞澄……………一〇三

遊歴文人のこと……………一三三

正月及び鳥……………一三一

菅江眞澄の旅……………一四二

寫眞解説



菅江眞澄



## 白井秀雄と其著述

「紙魚」といふ名古屋の雑誌に、昭和三年十一月――

これは「紙魚」の同人諸君に、私信を以て教を請ふべき問題かとも思ふが、實は此頃になつて自分以外にも、菅江眞澄に注意する人が急に多くなり、一日も早く解答の現れるのを待つて居るのみならず、柳田が如何に永い間此調査に苦心し、しかもどうして一向に獲る所が無いのかといふことを、聽かんと欲する人も少なくない。仍て僅かながら今日迄にわかつた點を書き列ね、且つは弘く世の同情ある援助を求むべく、之を眞澄の故郷の諸君に公表して見る次第である。

最初には是非知りたいたと思ふ要點を掲げると、田中道麿翁の門人又は社中に、三河吉田近傍

の人で白井幾代二秀規といふ人、或は白井英二秀雄といふ人は無かつたかといふ問題である。榛木翁の歌文集又は名簿類を所蔵せらるゝ方に、一度検索を煩はしたい。自分の推測では、幾代二秀規は英二秀雄の父か伯叔父か兄かで、前者が田中翁と交遊のあつたことは證據がある。自分の尋ねようとして居るのは、(一)その白井秀雄の學問の系統、(二)精確なる本貫、及び(三)その郷里を出てしまつた事情であるが、事によると此方面の搜索に由つて、この三つの點が少しは明かになることもあらうかと思ふのである。本年はちやうどこの隠れたる學者白井秀雄の百年忌であつて、自分は其記念の爲に此春は既に小文を公けにし、九月には又秋田市に於て舉行せられた百年祭典にも列席して來たのであるが、此等肝要なる諸點が未だ知れない爲に、其傳記を世に傳へるに至らぬのである。切に故國の學者たちの協力を希望する所以である。

白井秀雄は、其半生を送つた東北地方では、主として菅江眞澄の名を以て知られ、秋田市西郊の寺内村に在る墓誌にも其名を刻せられて居る。是が郷里の人々と縁遠くなつた一つの

原因ではあるが、彼が此名に改めたのは寛政享和の交、即ち三河を出てから二十年も後のことで、津輕藩の公記録等には、まだ本名が傳はつて居るのである。假名の菅江の方が今日の如く有名になつたのは、全く其遺著の全部が秋田人の手に由つて保管せられ、しかも何人が之を總括して、眞澄遊覽記と呼び始めた結果である。

眞澄翁は改名以後、二十七八年の間羽後の各地を巡歴して、文政十二年七月十九日に仙北郡角館の町で病没した。豫ての遺旨に基づき、門人鎌田正家等柩を奉じて寺内村に還り、之を今の處に葬つたので、墓石には歿年七十六とあるが、畫像記に依れば七十六が正しく、即ち寶曆四年戌の年の生れで、三河渥美郡の人であつたといふことだけは、藩費明德館の國學方鳥谷長秋といふ人の、碑銘の長歌の中にも述べられてある。しかし此以外の事實は翁自身著述が之を語るのみで、逸話といふ類のものも甚だ少ない。さうして一身の經歷に就ては、能文の筆者ではあるが、説いて必ずしも明瞭で無かつたやうである。或は何か人に語る能はざる事情があつて、郷里を立退いたものゝやうにも察せられるが、其點だけは少しも書

中には觸れて居ない。さうして色々の雑説ばかりが今の世までも傳はつて、奇を好む人の心を刺戟して居るのである。

併しそれを説き立てる以前に、先づその白井秀雄が如何なる事業を世に遺したかを語る必要がある。さうしてそれは同時に亦、今日知られて居る傳記の全部にもなるのである。翁は二十八歳の時、即ち天明元年に父母の家を出たと書いて居るが、現在ある紀行は天明三年三月以後のもので、それ以前の分は或川の渡し場で舟が覆つて流してしまつたといふ話である。其點も自分にはまだ問題の一つであるが、兎に角にこの天明三年から死ぬ迄の四十七年間が、悉く旅行の生涯であつて、その前期三十年ほどの信州及び奥羽の紀行が、不思議に寫本のままで今日まで傳はつて居るのである。

いつの頃からの事であつたか、人は其紀行の全部を合せて眞澄遊覽記と名づけて居た。しかも各家の藏本には區々の異同があつて、まだ卷次は一定しない。又書名だけを傳へて本を發見せられぬものが若干ある。私は試みにほゞ作成の年月順に、自分が一度讀んで見たもの

だけを次に列擧し、簡単に其内容を述べて見ようと思ふ。但し卷數は多くは一卷で、卷によつて大小はあるが、自筆自編の分だけは、何れも精密なる彩畫を伴なうて居る。

委寧乃中路(イナノナカミチ)

天明三年三月信州飯田に入り、それより天龍川右岸に沿うて北行し、中仙道の洗馬の驛からやゝ入込んだ本洗馬の村に著いてから、同じ年の十二月半までの日記。

わがこゝろ

同じ年の仲秋姨捨山に月を見た記事。歌が主であつて他の各卷の如き興味は無い。

來目路乃橋(クメチノハシ)

翌天明四年の六月末に、本洗馬を立つて、松本を経て戸隠山に登り、それから水内郡曲橋、松代善光寺等を一見して越後境まで出た紀行。

鰯田濃假寝(アキタノカリネ)

同じ年の九月初、出羽の鼠ヶ關から鶴岡に入り、羽黒山に参詣して後最上川を下り、酒田吹浦象潟木莊矢鳥を経て、山を越えて雄勝郡柳田村に達し、雪の中に春を迎へた迄の日記。

小野の古里

或は之を「齋田乃假寝」の後篇とする者もある。天明五年の春、雄勝郡滞在中屢々湯澤院内等に遊び、又小野小町の生地と傳ふる上關村を訪問した日記。土地の風俗を記すること最も詳細で、初夏に秋田に向つて出發する迄の事が書いてある。

楚頭賀濱風(ソトガハマカゼ)

同じく天明五年八月中の紀行。秋田と津輕領との境木蓮子もくれんじから筆を起し、海岸傳ひに深浦鯨ヶ澤、それから弘前に入つて土地の文人と交を結び、青森へ出て蝦夷地に渡らうとして之を中止し、再び引返して南津輕から北秋田に越え、陸中鹿角郡との境に來て滞留した迄。

けふの狭布(ケフノセバヌ)

直ちに前の日記に續いて、鹿角郡花輪湯瀬から、折壁の關を過ぎ、二戸郡田山に出で、淨法

寺の觀音堂、末の松山等を一見して今の東北本線の中山あたりで國道に出で、それから盛岡花巻黒澤尻と南進して岩谷堂附近まで來た紀行。

雪の膽澤邊(ユキノイザハベ)

天明六年十月から十二月までの日記。陸中山の目の大槻氏に滞在し、前澤水澤邊の知友の家を往來して居る。此年は藤原秀衡の六百回忌が中尊寺で行はれ、記念すべき色々の儀式があつた。東北農村の雪の中の生活が描かれて居る。

配志和乃若葉(ハシワノワカバ)

天明七年の四月に、陸中平原の芳賀氏の家を出て、又膽澤郡の諸友を訪問した紀行。春から夏へかけての北上川中流の村々の風光がよく描かれて居る。配志和神社は即ち同じ山の目村の式内社の名である。

霞む駒形

天明八年正月からの日記、やはり前の地と近い前澤の村上氏に居る。此地方の正月の風俗が

よほど珍らしいので、丁寧に之を記述して居る。又中尊寺の麻多羅堂の祭の見物をした記事も詳密である。此一節だけは昭和二年三月の「民俗藝術」に抄録して置いた。

岩手乃山

天明八年の六月に、いよ／＼蝦夷旅行を思ひ立ち、前澤水澤の舊知と別れ、再び四年前の通路を引返して北に向つた紀行。南部領と津軽領との境、野邊地狩場澤の間の處で筆を止めて居る。

率土が濱傳ひ(ソトガハマヅタヒ)

直ちに前の日記に續いて、青森灣の南西岸に沿ひ、小湊青森から半島突端の三厩までの日記。七月十三日の晩に宇鏡の濱から船に乗つて、翌十四日の曉天に松前の港に入つた。此一巻は殊に沿道の寫生畫が多い。

蝦夷喧嘩辨(エミシノサヘギ)

翌寛政元年の四月から六月迄の日記。江差福山を中心として東西の沿海を旅行して居る。今

日忘れられてしまつた此方面の移民村、それを頼つて渡つて來た内地の旅僧や藝人たちの佗びしい生活が、仔細に觀察してある。

昆布 苧(ヒロメカリ)

同じ寛政元年の十一月中旬、今の函館から福山までの海岸を歩いた記事、主として此あたりはまだ住んで居たアイヌの生活に注意して居る。別に又「廣布乃具」といふ一書もあつて、共に精確なる見取圖を以て充ちて居る。

蝦夷乃手布利(エゾノテプリ)

寛政三年五月二十四日福山を立つて、東場所一見の旅に上つた。半分は舟路、澤山のスケッチがある。北海道南岸の風景誌として是以上に詳しいものは外にはあるまい。有珠後方半蹄兩岳の見えるサハラといふ處に、五月の末の日に到着したまでと終つて居る。

千島の磯二卷

寛政四年前半の日記。松前城下の雪の底の正月から、次第に春になつて野山に出て遊ぶ迄の

季節の移り變りを述べて居る。此頃は城内の男女に歌の門人が多く、文筆の往來は多事であるが、記事としては興味のある部分に乏しい。

### 牧の冬枯

同じ年の十月七日、人々に送られて松前を出帆し、下北半島の奥戸(オコッペ)といふ港に上陸してから後の日記。次々に當地の風雅人を訪ねて村から村へ移り、師走の末に近く田名部の町に入つて正月を迎へた。

### 奥乃浦々

翌寛政五年の四月始めから夏三ヶ月の間の日記。主として田名部の町に滞在し、其間に近傍を遊覽して、恐山へも第二回第三回の登山をした。

### 牧の朝露

前の日記に續いて同じ年の秋三月の日記。大畑・易國間(イコンクマ)大間・奥戸など、昨冬見て歩いた邑里を訪ひ、各地の知人と盛んに唱和して居るが、途上の見聞にも珍らしい事實

が多い。

### 尾駭乃牧(ヲブチノマキ)

同じ年の冬三月の日記、十月下旬に一旦田名部を辭して太平洋岸に出で、小河原沼の邊の牧馬地方を過ぎて南下しようとしたが、雪に遭うてひどい難澁をして、再び田名部まで戻つて來た日記。如何なる書物にも記録せられざる奥州僻村の冬の生活が詳しく描かれて居る。

### 奥乃手風俗(オクノテブリ)

寛政六年の正月から三月末まで、専ら田名部に滞在して土地の風俗行事を書殘さうとしたもの、珍しい彩畫に富み、民俗學の研究者に屈竟の資料を供する。

### 淤遇濃冬隠(オクノフユゴモリ)

自序に寛政七年とあるが、實は亦六年の日記である。此冬も出發しようとして友人から留められ、田名部に滞在して時々附近を遊行し、翌春こゝを立つことにしたと記して居る。

### 津輕の奥

下北半島の三年

これは現在の所蔵者が後に附けた題箋で、其内には切れくゝの數篇の紀行を合綴してある。其一つは多分翌寛政七年であらう。三月二十二日に愈々南部領を去り、馬門狩場澤を経て津輕領に入り、小湊淺蟲の間の村々を巡つて花を見たといふなつかしい日記である。次の一篇も多分同じ年、十月中旬に青森を立つて、十一年ぶりに弘前黒石の邊を訪ねた紀行。途次多くの學者文人と逢うて交を締し、十一月末には再び青森へ引返した。第三は僅か間を置いて寛政八年正月一杯の日記。淺蟲の温泉に滞在して居る。十三日から小湊に行つて小正月前後の行事を見た。第四は二月の初に小湊を立つて、又弘前の方面を遊歴した紀行。岩木山の麓の村々を巡つて春色を尋ねて居る。四月初めのところ迄で、私の見た寫本は末が切れてある。

## 外濱奇勝

是も幾つかの紀行を集めたもので、標題は後人が附けたらしい。其一つは寛政八年の六月始め、弘前を出發して北津輕に遊んだ紀行。行きには十三瀉の東岸の路を行き、龍飛崎(タツビザキ)の突端を究めて小泊に一泊、歸路は湖西の屏風山下を経て、七月六日に鯨ヶ澤の港に

著くまで。十三の湊の光景が詳しく描かれて居る。第二編は同じ月七月十六日以後、此時はもう深浦港まで來て居る。十二年前に一度通つた海岸の路を、逆に大間越の近くまであるいて居る。尙此他にも二三篇の紀行があるが、それは便宜上他の紀行の後に附載する。

## 雪乃母呂太奇(ユキノモロダキ)

同じ年の十月末深浦の海岸を立つて岩木山の麓を廻り、山奥に在る暗門(アンモン)の瀧を雪中に見物した紀行。目的は珍らしい冬の深山の風景を、多くの畫にする爲ではなかつたかと思はれる。さうして再び深浦に還つて残りの冬を過した。

## 津介呂廻遠地(ツガロノヲチ)

寛政九年正月元日から六月朔日迄の日記。深浦の町の富める俳人竹越里圭は最も親しい友人であつた。そこに五月の七日迄居つて、かはつた正月や節供の行事を見た。それから鯨ヶ澤を経て弘前に出で、多くの舊友を尋ね、又津輕平原の處々の史跡を見巡つて居る。

## 錦乃濱

津輕に入る

是も三篇の小紀行を合せたもので、筆者自身が後年に淨寫して居るのだが、其順序は前後して居り、此書の第二篇は前の「津輕のをち」に續くものである。即ち寛政九年の六月中旬から、弘前藩の學問好きな醫師たちと同行して、領内各方面を旅行し、風土物産の研究をして居る。七月中旬は弘前で休養し、二十二日から出發して再び津輕半島の北の果まで、田舎路を詳しく歩いて居る。他の二篇は寛政十一年又は十二年のものらしく、一は弘前附近の正月風俗を記し、他の一つには同じ地方の秋祭の光景などが記されて居る。

津柯呂能通度(ツガロノツト)

二篇の日記を合せた一冊。共に寛政十年のものらしい。前者は東津輕郡童子村の正月風俗。多くの彩畫を挿んで珍しい土地の見聞を録して居る。學問上最も價值ある一卷である。次の一篇は黒石滞在中の隨録の如きもので、八月中旬の日附である。外濱奇勝の第三篇。即ち四月に青森を立つて弘前に行き、再び採藥の目的で岩木山に登つた紀行は、恐らく右二篇の間に入れらるべきものであらう。

櫻狩紅葉狩

是も多分寛政十年の春と秋と、弘前に近い中野といふ山村に遊んだ紀行で、其序を以て北奥の風物を述べて居る。文章よりも挿畫の方に力が入れてある。

栖霞乃山(スミカノヤマ)

寛政十一年か十二年の四月から五月、青森附近の春を賞した後、弘前方面に遊行した紀行である。

雪の道奥雪の出羽路

享和元年の十一月、筆者四十八歳の時に、いよいよ津輕を辭して出羽に入つた紀行。深浦の竹越氏を多くの人に送られて出立した。能代に著いたのが十一月六日。暫らく見物の後、十三日には土崎港に來て滞在した。歳の終りに近づいて、雪櫃に乗つて秋田の城下に入つた。

繁き山本

享和二年三月から六月まで、秋田山本二郡の間を巡遊した。藤琴川を傳うて其頃繁榮して居



た太良鑛山に入つて詳しく見物した。其折の見事な見取圖中には、經濟史の資料が多い。

阿仁乃澤水(アニノサハミヅ)

多分此年の秋、阿仁鑛山地方の寫生畫集。畫ばかりで文章は無い。

雪能飽田寢(ユキノアキタネ)

同じく享和二年の十月以後、阿仁山村の旅行記。十二月に入つてから白絲瀧を見に行つたのは、前の「雪の諸瀧」と同じく驚くべき冒險事業である。

秀酒企乃温瀧(ススキノイデユ)

享和三年正月から五月までの日記。直ちに前のものに續く。北秋田の大瀧の温泉に滞在して土地の風俗行事を見、又近傍を遊覽した。面白い畫が多い。

贊乃柵(ニヘノシガラミ)

同じ年六月中の日記。北秋田の扇田から大館の間を往來して、地方の舊傳を尋ねて居る。

浦の笛瀧

同じ年の暮から翌文化元年の夏までの、能代附近の遊覽を飛びくりに記述したもの。後年編集したと自序に書いて居るのは、方々の手帖のものを一つにしたことをいふのであらう。

恩荷乃金風(ラガノアキカゼ)

同じ年の八月、秋田城下を出發して男鹿半島に遊んだ紀行。湖上の秋色と天王社の祭禮の記事、及び此時代の赤神山信仰に伴なふ多くの傳説、豊麗なる寫生畫等。九月の末、能代に還つて舊友と會する迄。

みかべの鐘

是を享和三年の著と謂ふ人があるが、自分は文化二年であらうと思つて居る。此紀行中には古器考證の説と圖とがあつて、先生の學問の一つの新なる方面を示して居る。

霞む月星

文化三年春の遊覽記。能代の舊史と、安倍家に關する色々の傳説を載す。花の畫が多い。

雄賀良能多奇(ラガラノタキ)

同じ年五月の遊覽記。能代と其近くの海岸。此一巻は久しい前に見たので、詳しくは内容を記憶せぬ。又此前後の紀行には尙散佚したものが多くあるらしい。

夷舎奴安裝婢(ヒナノアソビ)

文化六年の七月、五城目附近に滞在して居た間の日記。此地方の特色たる盆風俗、例へば眠流し、俄踊や番樂舞の見聞を、繪入りで詳しく寫して居る。此中には二三他の畫工の繪が入つて居る。

氷魚乃村君(ヒヲノムラギミ)

八郎湖畔の谷地中(ヤチナカ)といふ村の正月風俗。繪最も面白し。前の「奥の手振」「津輕のつと」と比較せらるべきもの。末に雪中湖魚を捕る有様を述べてあるので此書名がある。文化七年の著。

雄鹿乃春風

同じ年三月のなかばに右の谷地中を立つて、再び男鹿半島に遊覽した前後の日記。花の盛り

に眞山本山に登つて、詳しい見聞を録して居る。此中の繪は拙著「雪國の春」初版に一枚だけ模刻して出して置いた。是も文字より挿畫の方が多し。

小鹿乃鈴風

男鹿の北浦に居て近傍を見てあるいた紀行。戸賀の港の遊女の生活なども寫してある。同じ年の五月のもの。

牡鹿乃島風

此二巻も前の續きで七月の半ばから、翌文化八年の二月初まで。正月は男鹿と能代との中間にある宮澤といふ村で迎へ、是亦細かに其地の風俗を記して居る。

簗酒金椽棠(ノキノヤマブキ)

文化八年三月から六月。八郎湖畔の村々を訪れた紀行。三月二十四日には家毎に軒に山吹の花を挿す風習があつた。それを寫した美しい寫生畫、其他此附近の風景圖が多い。

月邊遠呂智泥(ツキノオロチネ)

文化九年の盆の月夜に、大平山麓の村に遊び、後に人々と共に登山一宿した紀行。

勝手能雄弓(カツデノユミ)

勝手神社に参詣した紀行。藤原藤房の舊跡などを考證したもの。

花のしのゝめ

年不詳。土崎を曉に立つて秋田城内の花を見あるいた一日の紀行。畫が多い。

雪の山踏え

これも年未詳。五城目附近の山村を年の暮に巡歴した紀行。これも見事なスケッチを多く掲げて居る。

十 曲 湖(トワタノウミ)

是も某年の八月に、鹿角郡の毛馬内大湯を経て、十和田湖に遊んだ畫の多い紀行で、二十年ほど前に始めて發見せられた。

以上五十二種の他、尙同様の紀行に諏訪の海(天明四年)菴の春秋(同上)、千引の石、千島の名残(寛政二年?)、牧の夏草、瀧の松蔭、月の松蔭(享和三年?)、花の眞清水、花の眞阪路(文化六年)、浦の梅園(同上)、久保田のをしね(文化八年)、水の面影(文化九年)、麻裳マカの浦風(同上)の十三卷があることは自らも之を記し、別に淺間の煙、小町の寒泉、霧の高松、杜の下蔭、巡る山川、出羽の山奥などいふ遺著のあつたことは、往々にして人の説く所であるが、其等は私はまだ目に觸れたことが無い。兎に角に著作の數も非凡であるが、其多數が斯うして世に傳はり、能く百年後の學問を裨益したことも、珍らしい例と言はなければならぬ。しかも前に列記した五十餘篇の中で、現在印刷に付してあるものは、舊南部領内にかかる日記の十篇だけが、南部叢書の卷六に採録せられたに止まり、それとても不完全な傳寫本に依り、美しい挿畫は全部省略せられて居るのである。實際餘りに此繪が見事であることは、今後の覆刻を妨げるばかりで無く、又精確なる寫しを世に残すことを困難にして居る。ところが幸ひなことには著者自身、殆ど信じ難い程の根氣を以て、何度か自分の紀行を複

製して、一冊づゝ諸處の知人の家に留め置いたらしいのである。現在眞澄遊覽記自筆本の一番よく纏まつて居るのは、佐竹侯爵家に藏せられる明徳館本であるが、それは彼の七十歳の年とかに、藩の學校へ一括して寄贈したといふもので(今の縣立圖書館本は、近年になつて之を寫したものと云ふ)、各卷同様式の美本で、少なくとも保存の爲に特に之を整頓したことは明かであるが、別に其以前にも人に知られ、又零冊として流布するものは多かつたのである。それから内閣文庫に今在るものは、畫は全部、文も多くは他人をして淨寫せしめたものだが、是は別に前藩公佐竹美和の旨に基づいて献上したと傳ふる本らしく、著者自身其淨書にも干與したと見えて、其精美は却つて前者に越えて居る。さうして今の帝國圖書館本は近年是から寫したものである。

白井秀雄の著作としては、なほ數種百卷にも近い隨筆類があるが、學問の上から見て、遊覽記ほどは大切で無いと思ふから今は省略する。それよりも秋田人の特に晩年の彼に負ふ所のものは、雪の出羽路、月の出羽路、勝地臨毫の三つの未完成の大著である。文化の中頃か

ら、所謂菅江眞澄翁の名聲は漸く高く、藩の學者にも其力を認めた人が多くなつて、多分那珂碧峰(通博)といふ人の推薦であらうといふことだが、新たに領内地誌取調方を囑せられ、それから後は公人として仙北以南の村々を巡回した。翁の最初の計畫では、久保田領六郡を三つに分ち、雄勝平鹿の二郡を雪の出羽路、仙北河邊の二郡を月の出羽路、残りの山本秋田を花の出羽路として記述する積りであつたらしいが、遺憾ながらその大規模のものを實現するには、少し年齢が足りなかつた。北地の交通には我々の知らぬ障碍が多く、十七年餘の歲月を殆ど此事業に専心して、文字通り中道にして燈れたのであつたが、なほ其收穫は半分にも足りなかつた。今日知られて居るものは稿本までを加へて、雄勝郡が五卷、平鹿郡が十四卷、仙北郡は二十五卷あつて河邊郡はまだ一卷も無い。「花の出羽路」の分は寧ろ前年の紀行も多く、あまりよく知つて居るので後廻はしにしたと見えて、ほんの少ししか手を著けて居なかつたやうである。

それ程また骨の折れた根本的の調査でもあつた。元來舊記といふやうなものは少ない土地

だが、それ等は有る限り勿論すべて目を通した上に、主として材料を自身の踏査と、住民の談話から得ようとした趣旨は、著書の上にもよく現れて居る。即ち一郷一莊を一巻にまとめ順序よく排列した一點を除いては、遊覽記を書いた時と同じ態度であつた。あの時代に企てられた地誌類の中では、全く類の無い珍しい方法で、單に百年後の各村に好記念を遺したといふ以上に、今後の我々の事業に對しても、立派な手本を與へたと言つてよい。それから勝地臨毫の方は、現在知られて居るものが十一巻ほどある。是は地誌以前からぼつ／＼と描きたためであつたものと思はれるから、寧ろ遊覽記の附録とも名づくべきものだが、其題材が風景よりも生活に力を入れ、邑里の外景、道路渡津などの實狀を寫さうとして居るので、やはり郷土の爲には大切な歴史である。さうして先生が先づ住民と親しんで、彼等の爲に著述するといふやうな遣り方は、偶然に其保存の上に大きな効果があつた。だから自分たちは今でもまだどこかの舊家に、少しづつ其遺稿を傳へて居たものが、現れて來はしないかと思つて居るのである。

二十年前ばかり前に我々が此書物を読み又引用し始めた頃までは、秋田縣外の人で菅江眞澄を知る者は甚だ稀であつた。近頃になつて津輕や南部の方でも、追々に彼の遺蹟を見出すに至つたが、なほ其故郷の地に於ては、どこで生れてどうして國を出たかを語り得る人も無いのである。私は去る大正九年以來、時々三河の人に就て此事を尋ねて見るが、何分にも百五十年にもなることで、記憶といふものが殆ど無い。其上に白井氏は其書中に我經歷を語ることに、必ずしも卒直放心では無かつた。以前奥羽の邊陲に世を狭めんとした人の、是はごく普通の態度であつたといふことができる。いづれよく／＼の事情が無ければ、斯うして入つて來て還らずにしまふ筈も無いからである。遊覽記の三十年を見て行くと、先生自述の語は時によつて一致して居ない。最初には全國の古社大社を歴拜して、歸つて父母の耳を慰めるなどとも書いてあり、幾度か土地の人から三河に還る人を送るといふ送別の詩歌を貰つて居るのだが、しかも新たに是ぞといふ此人の心を繋ぐもの無くして、尙次から次へ移つて止まらなかつたのである。私は是には必ず還られぬ理由があつたことと思つて居る。

之に就て一二の逸話の傳はつて居るのは、先生は始終頭巾を被り通しで、「常冠り」といふ綽名さへあつた。秋田の藩主が謁を賜はらんとする際にも、頭巾の儘でよければ参上すると言つたといふ話もある。それを何とかして脱がせて見ようとした者があつて、或時は強ひて迫つたところが、温厚なる眞澄翁は其時ばかりは腹を立て、刀を取つて捻くりまはしたといふことである。うそかも知れぬが先生が角館で病歿した際にも、若い人々は好奇心のあまりに、その頭巾を取つて見ようと謂つた。之に對しては老人たちが承知せず、あれ程人に隠して居られたものを、今更あばくのは人情で無いと言つて、其儘葬つてしまつたといふ話である。私は多分刀癡でもあつたのであらうかと思つて居る。

或は又先生は加賀の老公の落胤であらうと言つた者がある。其根據は甚だ薄弱なもので、假の苗字が菅江で紋が梅鉢であつたことが一つ、次には今残つて居る先生の畫像に自ら讃をせられた歌が

春雨のふる枝の梅の下雪香をかぐはしみ草や萌ゆるらん



眞澄

とあることで、何か意味ありげな、しかも「か」の字を二つ重ねたのは暗示であらうといふのである。如何にも空な話ではあるが、わざわざ「斯ういふ歌を題した翁の心持はなほ不明である。自分は寧ろ先生の境遇が、そんな風説の流傳を阻止せしめなかつたのではないかと思つて居る。兎に角に秋田人の先生の素性を知りたがつて居る熱心は非常なものだが、現在までの資料では郷里の村の名すら明かならず、遊覽記の文を見ても一處もそれを言はず、或書の序文には「三河國乙見なる菅江の麻須美」と記し、又一書には入文(イブミ)の里とも書いて居る。さうして私たちが當つて見ると、其名の土地には何の形跡も無いらしいのである。

たゞ一つ秋田の人の今もいふことに、碑銘を書いた鳥屋長秋の子に山本眞秋といふ人があつて、翁の歿後旅遊の序を以て三河の故家を訪問した。農家ながら笠門のある相應な家で、家人出で、遠來の客を迎へ、翁の舊事を聽いて感動したと傳へて居る。是も又聞きの覺束ない説であるが、兎に角豊橋又は其附近の生れであつたことだけは、ほゞ推定してもよいと思つて居る。

ところが昨年になつて、始めて僅かながら消息がわかつて來た。前に擧げた配志和乃若葉乃ち天明七年四月の日記に、此春平泉の毛越寺の衆徒の皇都に登る者に、我父母の國吉田の驛なる植田義方への文通を托して置いたところが、今日其返事が來たと書いてある。そこで搜して見るとその義方といふ人の子孫は儼存し、豊橋郊外の高洲新田といふ處に住んで居る。それが朝日新聞の同僚名倉一氏の妹婿、植田七三郎君であつたことすら意外な悦びであるのに、此家は火災にも遭はず、且つ代々丹念に古い文書を保存して居るのである。今後必ず色々の資料を得ることと思ふが、今日までに發見せられたものだけでも、先づ大切な手掛かりであつた。

其一つは前に掲げた外濱奇勝の一部分が、私の見た本書又は現在佐竹家に藏せられる他の遊覽記と同様式の自筆で、二十枚ばかりも出て來た。是は早くとも寛政十年のものであるから、白井氏が爾後なほ久しい間此家と文通し、且つ紀行を複寫して寄贈する程度の交際を續けて居たことが知れる。次に現れたのが紙に包んだ薄の穂が一本、上は書に義方翁の筆で「天

明七年十一月何日、陸奥眞野萱原の尾花、白井英二生より送り來る」とある。天明七年の後半は遊覽記の全く缺けて居る期間で、自分は多分此間に松島仙臺方面の旅をしたことと思つて居る(松島の名月を賞したといふことは後の日記に見えて、秋の頃此地方に居たと思はれる年は此年より他には無いからである)。さうすると眞野萱原の舊跡は方々にあるが、是は多分其中の最も有力な一つ、即ち陸前石巻港の附近にあるものをさう認めて、國を出てから四五年後の所謂白井生は、此地を遊歴し、理解ある郷里の先輩を思ひ出して文通したに相違ないのである。石巻地方には舊家の藏書家なども多い。或は後日新たなる遺物が、尋ねたら此方面からも出て來るかも知れぬ。

第三の資料としては、是も紙に包んだ鳥の羽が一枚、其うは書には「天明八年十一月一日至、白井英二贈之、松前の鶴の思ひ羽」とある。即ち此年の七月十三日の夜、松前に渡つた後に送つて來たもので、兩方共に特に白井生又は白井英二とあるのを見ると、實際は幾分か保護者被保護者の關係であつた。實際又江戸時代に於ける植田氏の家格は、平民ではあるが



可なり高かつたから、白井秀雄の家出一條に直接干與したとは見られぬまでも、平生何か世話を受けるやうな地位に居たのかとも考へられる。親を思ふの歌や文は幾らも見えて居るが、家へ文通した記事は一つも無く、此植田家とばかりは二十餘年の往復が続いて居たのは偶然とは思はれず、愈々以て此家の舊記類に期待せられる次第である。

それから今一つ、是は直接の關係は無いが、やはり植田氏から一冊の寫本が出て來た。「東風俗」と標題して、東歌に音譜を附したもので、其奥書には賀茂眞淵の署名と、それを傳寫した本居宜長、田中道膺、次に白井幾代二秀規といふ人の識語があり、次の頁に亦義方が貼紙をして、此書白井幾代二主より贈らると記して居る。英二秀雄は父の名を秀眞と謂つたと秋田の人々は言つて居る。是とは合はぬが名が近く、又傳寫の日附が安永七年、秀雄の二十五六の時のことであるから、多分はそれが父であり、其父も亦植田氏の先代と交際のあつたことが想像せられるのである。

一體に白井といふ苗字は、渥美郡の多くの村々に群を爲して居る。牟婁吉田にもあれば田

原町にも一團の白井家が住んで居る。海道筋では二川町の大岩にも、寶飯郡の下地町にも澤山ある。現在豊橋の停車場のある邊は花田といふ村で、そこも住民は大部分が白井であつた。今は屋敷を移し盛衰も多いらしいが、植田氏の先祖と親しい交際のあつたのは、或はこの花田村の住民であつた爲に一層不明になつたのではなからうか。今一度寺の過去帳などに就て檢して見たいと思つて居る。

それよりも自分が希望を繋ぐのは、榛の木のをちの日記なり書翰なりで、それがもし多く保存せられてあるならば、その中には當時の珍書「東風俗」を貸して寫さしめた白井秀規の事が、何か見えて居るかも知らぬ。或は歌文の中にも贈答往來の章が無いとも限らず、更に想像を逞しくすれば、この天分豊かであつた青年の學徒白井英二秀雄の行狀なり又逸話なりが、幸ひに書留められて居らぬともいへぬ。白井秀雄は其生涯の萍遊を開始する以前、既に京洛を知り又大和を知つて居る。天明以前の漸く萌し始めた新國學から、もう大分著しい感化を受け、其上奥羽の五十年の流寓中に、追々公けにせられたる古事記傳や和訓栞、其他文學考

古の書までを、いつの間にか読んで居たほどの篤學である。三十の歳まで何の著はるゝ所なくして、故郷の村に埋もれて居たやうな人では無かつた筈である。しかも境遇は誠に是非もなきもので、是ほど濃厚に中部日本の學問の骨髓を體得し、之を北邊にまで運んで行つた才人でも、其故郷の記憶に於ては今なほ生れなかつたも同じ姿である。

## (追記)

一、二十年近くの間、白井秀雄の名を以て東北の各地を歩いて居た人が、どうして菅江眞澄に改めたかは不審のやうであるが、私にはその必要が時を隔てゝ二度に起つたので、いはゆる姓名を變じて旅をする者とは、事情を異にしたかと想像せられる。享和元年に再び秋田領に入つて來た際は、まだ白井の苗字は棄てゝ居なかつた證據があり、是は又十六年前の舊知の、少しは残つて居たらうと思ふ翁としては當然である。文化六年六月の作、南秋田五城目の地藏堂の扁額には、自ら三河國白井眞隅と署名し、その他同じ頃の日記の序文にも、

眞隅・眞栖と書いて居るから、或はこの前から先づ名乗だけを替へたのかと思ふ。文化七年の雄鹿乃春風の序には、三河國乙見なる菅江の麻須美とあつて、菅江の姓が明かに見えて居る。尤もずつと以前の瞻澤江刺の日記にも、菅江眞澄の名は用ゐられて居るが、これは晩年になつて改寫したものだから追記と見てよい。現に六日入の鈴木家の記録にも、又弘前時代までの他人の文書にも、すべて白井秀雄の名で通つて居るのである。曲亭馬琴の著作堂雜記には、その白井氏が松島で詠んだといふ一首の歌が載録せられて居て、是は天明七年の名月の頃に、秀雄がこの附近に旅をした證據の一つになつて居るのだが、それにはちやんと三河白井眞澄と出て居る。但しこの雜記の出來たのは、歌の時から二十五年の後、文化八年の頃のことと思はれるから、必ずしも只野眞葛などの、仙臺の知人から聞いたものと見るには及ばぬ。その歌といふのは

ながめすてゝ歸らんもをし中々に霧たち隠せ松島のうら

といふ、我々には一向感銘の無い歌であるが、今でも秋田の人たちが評判にして居るのを見

ると、恐らくは年経て後、歌主が自ら之を披露し、それが偶然に記憶せられて、江戸の文士の耳にまでも傳はつたもので、白井眞澄の名が古かつた證據にはならぬだらう。この人の父の名を秀眞と謂つたことは、書いたものにはどうも見えないやうに思ふが、秋田でも又津輕でも、専らさう言ひ傳へて居る人が多い。それも本人の口から無いと傳はりさうも無いことで、もし事實とすれば是と眞澄眞隅等の新らしい名乗とは、關係のあつたことが想像せられる。さうして一旦その眞澄の字を用ひ始めると、それに菅江の姓を冠らせるのは寧ろ自然である。大正九年の初冬、自分は翁が自ら謂ふ所の三河乙見の里に見當を付けて、先づ岡崎に赴いて其家郷の地を物色した。乙見は乙川の岸に近い村落の名であるのみか、以前はこの邊一帶の莊名であつたと傳へられ、そこには又菅生といふ古い稱呼もあつたからである。其頃はまだ此人の本名が、白井秀雄だといふことを知らなかつた様に思ふ。そこで土地の諸君に向つて、頻りに菅江眞澄の事を尋ねて居るうちに、別に今一人の菅井眞澄といふ學者紳主が、明治年間に此地に居たことを知つた。察するにこの名と苗字には人知らぬ調和があり、

それが又この郷土とも結び付く何物かをもつて居るのである。白井氏の本貫の渥美郡に屬したことはほど確かだが、前には淨瑠璃姫六百年忌の追善の催しにも参加したやうに、何かこの乙川の水の流れと、絶えぬ因縁を通して居たのが、久しい歳月を隔てゝ想ひ浮べられたので、是をこの旅人の心からの、望郷の文字とも私は見て居る。淨瑠璃御前の遺跡に就ては、後の隨筆にもかなり熱心に説いて居る。天明二年の六百回忌の供養といふのは、多分岡崎近くの寺で行はれたことであらうから、却つて何かの手掛りは額田郡の方にあるのかも知れぬと思つて、今にまだ望みを絶つては居ない。それにつけても源秀超といひ秀規といひ、はた秀眞とも傳へて、父かと思ふ人の名のまぢ／＼になつて居るだけは残念である。

一 菅江眞澄の紀行は、「伊那の中路」の天明三年三月半ばから始まつて居るが、其卷頭には二月に故郷の三河國を立ち、美濃を経て信州に入つたまでの日記が、「白波にうち取られたれば術無し」と書いて居る。ところが信州洗馬村に留めて去つた壯年の頃の原本は、四月一

日の市田村の條に筆を起してあり、其前月の飯田附近の山々の花盛り、及び此城下が三月朔日の大火に焼け盡した記事などは全く見えない。察するに今一冊三月末までの日記があつて、洗馬には残さなかつたか又は紛失したのを、本人は旅中携へてあるいて居たのである。洗馬で新たに発見せられた「筆のまゝ」と題する一冊の中には、別に少しばかりの日記の断片が保存せられて居て、是は矢作川の中流右岸、三州枝下(シダリ)村の記事と思はれるから、或はその紛失したものゝ一部だつたかも知れない。原本無題であつたのを、秋田叢書別集卷四には、「枝下紀行」の名で載録せられて居る。少年の頃から諸國を旅して居ることは確かであるが、紀行としてはもう是より古いものは傳はつて居ない。

一、この一文が公けにせられた後、菅江眞澄の遺著は次々に公刊せられた。深澤多市氏の畢生の事業たる秋田叢書の中には、現在知られて居る限りの「雪の出羽路」と「月の出羽路」の全部、「花の出羽路」の断片、及び「勝地臨毫」の五冊が載録せられてある他に、更に六卷の菅江

眞澄集が、別巻として立派に複製せられ、是には前に掲げた五十三部の紀行のみならず、當時自分がまだ所在を知らなかつた十數種の小品も網せられ、その過半で亦紀行である。深澤氏の病歿がこの計畫を頓挫せしめなかつたならば、必ず續刊せられたと思ふ約二卷ほどの雜著が、今なほ筆寫のまゝで各處に傳はつて居ると、書名のみ世に知られてまだ発見せられない若干の短篇とはあるが、大體に主要なる業績は活字となり、讀書人の眼には觸れやすくなつて居る。以前南部叢書の中でも十種の紀行が刊行せられたことは、本文に述べた通りであるが、彼は舊南部領に屬するものを主とし、其順序も飛びくになつて居るのみならず、底本は近年の筆寫本で誤讀が多く、校訂も亦必ずしも精密でない。之に比べると秋田叢書の方は遙かに親切で、直接に佐竹侯家の自筆本に據り、不必要なる和字を漢字に置き換へ、句讀を明かにし要目を標出して、頗る繙讀に便ならしめて居る。自分はこの集の監修者といふことになつて居るが、是は單なる看板に過ぎなかつたことを告白する。實際の事務に當つたのは、主として深澤氏の族人國本善治君であるが、その校訂の誤少なく整版の鮮明なものには

敬服して居る。眞澄翁の紀行には挿繪が甚だ多く、中には「阿仁の澤水」の如く、全編畫圖のみのものさへあるが、秋田叢書の方はその一枚をも省略せず、他の一方の一枚も入れてない。固より簡略な寫眞であつて、原畫の美しさを傳へ得たとは言へぬけれども、著者の意圖だけはほど親ふことが出来る。平福百穂君在世の頃、自分は同君等と共にこの紀行の特に優れたもの、例へば男鹿の五風や「氷魚の村君」などを、原色で摸刻して見ようと企てたことがあつた。種々な障碍があつて實現に至らなかつたけれども、幸ひにして昭和四年の夏から、長野縣の同志の支援を得て、先づ信州に屬する最初の四冊を覆刻することが出来た。其中の一冊はこの仕事が始まつた後に、偶然に舊縁の家から出現した自筆本に據り、他の三種は共に内閣文庫所藏のものを原本とし、之を寫眞版に覆製して、別に活字の讀本を副へた。内閣本は所謂天樹院本、即ち學問を愛した佐竹義和君の命によつて、淨寫せしめられたものかと思はれ、字畫共に精美であるが、繪は少なくとも著者の原作で無いたことが明かであり、文字もよく似ては居るが、或は別人の筆でないかとも疑はれた。それで自分は第二段の計畫とし

て、青森縣人の篤志家を勧誘し、更に明德館本の覆刻を思ひ立つたのであつた。明德館の諸本は現在は佐竹侯家の有に歸して居る。菅江翁在世中に献納したと傳へるのは或は誤りではないかとも思ふ。全部が自筆であるのみか、著者生涯の愛撫の痕が遺つて居る。之を何とかして津輕南部の人々に、傳へたいといふのが素志であつたが、たつた一冊の「奥の手風俗」を出しただけで、共鳴者が乏しく損失が多く、一方には好意を以て仲介せられた平福氏、侯爵家令の石井忠利氏が相次で物故せられた爲に、事業は頓挫してしまつたのである。たゞ間接の効果と見てよいのは、改めてこの數十卷の寫本の、有用貴重なることを世に認めしめ、同時に深澤君等の辛苦の如何に價値多く、その傳へんとして未だ能はざりしものが、どれ程残つて居るかを明かにしたことであつた。所藏者佐竹侯爵が原本の保存の爲に、力を盡されることは勿論、世の中太平ともならば再び信州の刊行會の計畫が、各地に繼續せられるやうになるであらうことも疑はれない。深澤國本二君の活躍する以前、秋田縣で菅江眞澄翁の爲に最も多く働いたのは、眞崎勇助といふ考古學者であつた。この人の蒐集中にはなほ二十數

種の、明德館に入らなかつた遺著が含まれて居たが、現在はそれが悉く大館町の栗盛教育財團に買取られて珍藏せられて居る。眞澄遊覽記の是まで知られずに居た卷々が、この文庫のみに在つて、幸ひにして秋田叢書の中に載録せられ得たものも幾つかあるが、それよりも著者の傳記の爲に大切であるのは、「筆のまに〜」と題した數卷の隨筆、其他若干の雜記類で、是等は今もまだ活字になつて居ない。自分は其保存と將來の利用に就て、深い關心を抱かすには居られぬのである。他の多くの舊家でも掛物とか短冊、いはゆる斷簡零墨の末までも珍重して居るから、著作や書翰の類とても、散佚するやうな處れは今は無からうが、それだけでは實は何にもならぬのである。少なくとも社會に向つて栗盛財團の如く、爰に持つて居るといふことを明示する必要があると思ふ。從來の保存の中には、たゞ忘失を待つて居るかと思はれるものがあつた。故胡桃澤勘内君が東京で發見して、直ちに寫眞版にして世に頒つた「鄙の一曲」なども、もとは舊友の家に藏せられた眞澄翁の自筆本であつた。現代の蒐集家中にも人に誇るだけで、死ぬまで死藏して置く者がまだ大分に居る。この本がさういふ人々の

眼に觸れる前に、胡桃澤君の手に歸したことは、單なる好運でしか無かつたのである。或は眞澄翁ほどに運のよくない學者が、まだ地方には幾人もあるのではあるまいか。

一 舊秋田領の六郡を二郡づゝ三つに分けて、雪月花の出羽路といふ地誌を著はさうとした計畫は、菅江翁の自筆のものにも書き示されて居る。その三つの中で、中部の仙北河邊の二郡を書いた「月の出羽路」が最も多量に世に残り、しかも著者は其調査の進行中に、仙北郡の東部の村里で世を去つた故に、他の四郡の地はまだあらしの案ばかりで、過ぎたやうにも考へられがちであつたが、この人の著述方針は可なり尋常と異なつて居たのである。仙北河邊の二郡の村々とても、この方式で記述して行けば、まだ何倍かの卷數になる程残つて居ると共に、「雪の出羽路」といふ平鹿雄勝の二郡にも、可なり詳細なよく整つた村誌が、僅かながらもう出來て居たのである。秋田叢書の中には共に載録せられて居るから、比較をして見れば容易にわかるが、月雪兩著には精粗の差は無いと言つてよい。たゞ第三の「花の出羽路」

だけは、既に津輕から二度目に入つて來た當時、即ち地誌の企てが始まる前に、毎年遊歴して澤山の日記を書いて居るから、わざと後まはしにして置かれたものと私も思ひ、又さう謂つて秋田山本二郡の人々を慰めても居た。ところが實際は此方面にも、片端はもう手を著けて居られるのであつた。「筆のまに〜」の巻五に、あさひ川と題して此流域の記事を掲げ、「花の出羽路」朝日川の巻に書いたといふことが見えて居る。朝日川は今は旭川と書く雄物川の支流で、仁別に入つて行く一つの溪谷だが、もしも秋田叢書十二巻に載つて居る「松藤日記」の一篇が其全部だつたとしたら、是はまだ其口元の數部落しか取扱つて居ない。さうして秋田郡は南北に分たれてあの通り廣大なのである。百まで達者であるいたとしても、この速力では到底書き盡せないことは判つて居る。どういふ氣持で此様に飛び〜に、たとへば花園の蝶などの如く、あそこ〜をつゝいて居たかは知らぬが、少なくともこの翁の旅行辭は老いなかつたのである。斯ういふ奇抜な又詳細な村誌を作るには、たゞ行きすりに村役人と問答したり、もしくは舊記文書を寫し取つただけでは足りない。どうしても親しい知人を

見つけ、且つ何日かの滞在をしなければならなかつたらう。さういふ便宜のある土地を求めるとすれば、結果は斯ういふ風に各郡を來往することになり、それが又本人に取つて、必ずしも迷惑至極な任務でも無かつたらうと思ふ。この意味から言ふと、雪月花の出羽路は未完成の風土記ではなくして、寧ろ今までの遊覽記の繼續であつた。單に旅程に限られ意外な遭遇が少なく、従つて逸事挿話に乏しいといふだけで、その觀察點と考證態度、乃至は表現の方式までが、中年以後の幾つかの旅日記と、さして變つたところも無く、或は吟詠に懐古の情を托したり、又は各巻にやゝ事を好んだ標題を付して、獨立した一書の形を與へようとした點までがよく似て居る。眞澄集の中に列ねてある高松日記・駒形日記なども、書名だけを見ると紀行のやうに見えるが、實は皆「雪の出羽路」の資料の一部分を抄寫した自筆本であつた。乃ち行く先々の友の家に、土地に關係した日記を留めて去る習慣も、晩年までなほ續いて居たのである。或は今あるものが初度の稿本であつて、後日全部を綜合して統一ある地誌を書かうといふ腹案があつたのかも知れない。それには歲月の足らぬことは明白であるが、

學者は時々はさういふ無勘定なことをする者である。秋田叢書に出て居る「花の出羽路」の斷篇を読んで見ると、二つの異本があつて内容は相同じく、たゞ書き方だけが可なりちがつて居る。一方は一段と紀行に近く、他の一つの方は幾分が地誌の形を備へて居るのが、黒川道祐の洛外巡覽記を想ひ起さしめる。是が雍州府志の準備作業の記録であつたことを、或は眞澄翁も既に知つて居て、今いふ眞澄遊覽記の總稱も、自身晩年に及んでさういふ呼び方をして居たのかも知れぬ。實際に又「伊寧乃中路」以下の旅行記よりも、この雪月花の出羽路の方が、遊覽記と名づくるにはふさはしいのである。

(昭和十六年九月)

## 秋田縣と菅江眞澄

—秋田考古會菅江翁百年記念會講演、昭和三年九月—

### 緒言

昨年の五月、私は仙北に來て居つて偶然に秋田考古會の年會があることを聞き、御案内も待たずに出席を致しまして、皆様とこの菅江翁百年祭の御相談をしたのであります。自分の見解を以てすれば、秋田縣の考古學には、翁は忘るべからざる創設者の一人であつて、其傳統は故眞崎勇助翁を始めとし、多くの景慕者の研究にも之を認めることが出來ます。秋田考古會たるものがこの百年目を空しく逸せられるべきで無いといふことを申しました。それが因縁となつて本日は私一人、遙々御招きの榮を忝うすることになつたのであります。勿論



志を同じうする者はまだ此縣以外にも段々あります。岩手青森の二縣にも、少數ながら翁の事蹟を研究して居る者もありますし、東京にはもう大分前から、學問の上で色々の恩恵を受けた者があり、翁の故郷の三河國に在つては、殊にこの久しく埋没して居た篤學の士に對して無限の渴仰を寄せ、従うて本日の御催しに共鳴して居る人が少なくないのであります。私は要するにそれ等の人々の感情の一部を代表して居るといふに過ぎませぬ。菅江氏の閱歴又は事業に就ては、特に諸君より多くを知つて居ると自信する者では無いのであります。言はゞ我々の眼に映じた羽後と、この遠來の旅客との因縁情誼を述べて、土地の方々の御參考に供して見ようといふまでであります。

## 百年後の批評

元來この百年記念祭といふものは、つい近年に始まつた流行であります。社會的に見て可なり意義のある仕事だと私は思つて居ります。是非を百年の後昆に問ふといふことは、昔

から男兒の本懐としたところでありますが、實際死後の公平なる品評を期するには、百年は長からず又短かゝらず、ちやうど頃合の期限であります。ところが御手本の西洋諸國では、故人の誕生から百年を算へます爲に、例へば本年露西亞で舉行せられた百年祭のトルストイの如く、七十何歳までも長命した人になると、まだ骨肉の者も多く生存し、著述は盛んに讀まれ、信奉者は各方面に活躍して居る。靜かに其人物の眞の偉大さを見ようとする者に、色の私情が干渉を加へます。之に反して我々の年回計算法に由りますと、所謂墓木は既に拱となり、知友は共に與に去つて黄土に就き、其子孫も亦昔を忘れんとして居ります。例へば寂寞たる寺内村の砂丘に登つて見ましても、曾ては柩を搖がして慟哭したらうと思ふ鎌田正家まさやの一門の者も、悉く今は小さな一塊の石であります。しかも其間に澄み湛へたる一泓の水の如く、菅江眞澄の遺業は世に存して過ぎ行く人々の立寄り來り掬むに任せて居るのであります。それが百年後の秋田人に、何を説き何を感じしめんとして居るのであるかは、諸君自ら平心に之を検査することが出来るのであります。一身の私に立つて見ますれば、或は氣の

毒とも心細いともいふべきものかも知れませぬが、永世に對して我々學徒の期待する所は、要するに是を出でぬのであります。學術の眞價に關して何等理解し又善用する所も無く、徒らに悲涙を以て衣の袖を沾らして見ても、それも亦百年を待たずして空の空に歸すべきことは、寧ろ今日の如き機會が、我々に授ける大いなる教訓であります。

## 行つて又來る

眞澄翁が諸君の郷土に對して表したる友情は、獨り特色ある大量の風土誌を遺留すべく、二十幾歳の月日を此國に費銷したのみではありません。本土北端の三つの縣のうち、最も久しく翁の足を引留め、土との因縁が殊に痛切に深かつたといふ以上に、他の地方では單にただ一回、歴遊して去つたといふに過ぎぬに反して、此縣へは年を隔て、少なくとも二度、立戻つて尋ねて來て居るのであります。漫遊の旅人としては是は珍らしいことで、大抵は飽きるまで居る故に、出てしまふと再び足が向きにくいのであります。そこには何か斷ち難い

情味が繋がつて居たのでは無いかと思ひます。さう思つて見ると、翁の初期の紀行「鰯田之假寝」又は「小野乃古里」の中には、當時の秋田縣人の素朴にして又醇良なる接客法の、深い感動を與へた跡が窺はれるやうに思ひます。天明四年の七月末に、後年の菅江眞澄、當時白井英二秀雄と謂つた三十一歳の旅の文人は、三河を出て信州の北の境まで來て居りました。それから僅か四十日間に、長い越後國を通り抜けて、九月上旬にはもう鼠ヶ關ねずがせきに來て泊つて居ります。それから鶴ヶ岡へ、次に羽黒山の登拜をすませて、いよいよ三崎阪を越えて由利郡に入り、象潟きさかたの見物をしたのが同じ月の二十九日であります。本莊にはたゞ一晩止まつて、十月一日には前郷、二日には矢島へ來て丸一日だけ滞在しました。ところがそこを立つて川内村伏見といふ處で、測らず大水が出て川留に遭ひ、五日ほど待つて居るうちに段々と山國の冬が深くなりました。漸う十日の朝焼山越といふのを越えて、タムロ澤といふたつた三軒の村に、其晩は一宿を求めたとあります。それから西馬音内にしおないを過ぎて三輪村の杉の宮に詣り、其隣村の柳田といふ部落に來た頃は、もうひどい大雪の日でありました。そこで立寄つた家

が草薙某といふ農家で、眞澄翁の日記には努めて人名を詳かに書いてあるのに、此人だけは終始草薙某とばかりあるのを見ますと、風流人でも無く又さう立派な親方衆でも無かつたことがわかります。その某が見ず知らずの若い旅人に向つて、どうして斯んな雪に旅などが出来るものか、何が何でも春まではこゝに逗留せよと勸めて、とう／＼翌春の郭公が啼く頃まで、出たり入つたりして此家の厄介になつて居たのであります。其間には湯澤にも行き又院内にも友人が出来て、次から次へと三日五日づゝ泊つてあるきました。小野小町の故郷だといふ芍薬の多い村にも遊びに行き、色々の話を聽いて居ります。それが後年の紀行のうちに折々想ひ起されて居るのを見ると、雄勝郡の印象は極めて深かつたのであります。三十幾年を隔てゝ再びこの郡の地誌を書きに入つて来た時には、舊友はどうなつて居ましたらうか、不幸にして其頃の日記のやうなものはまだ出て来ませんが、失禮ながらこの雪の深い羽後國を、居心地のよい國だと思つて、年を取つてから又遣つて来て、さうして永くこの土の下に眠ることになつたのは、必ず夙にそれだけの宿縁が、結ばれて居たものと解しなければなりません。

ません。

### 十七年ぶりに

眞澄が始めて久保田の城下に入つて来たのは、天明五年の百花繚亂たる暮春の頃でありました。此地には雄勝で知合となつた二三の雅人などもありますから、平鹿仙北の二郡は當時比較的さつと見て通つたかと思ひますが、其二三ヶ月の日記はまだ見つかりませぬ。秋田の櫻については後年「花のしのゝめ」といふ一篇の遊覽記がありますが、白々とした東海岸の花ばかり見馴れた我々の眼には、北地の櫻は殊に艶麗に見えますから、定めし此歌人も深く心を繋がれたことでありませう。さうして所謂金風肅殺の物悲しい光景には接せずして、舊八月の月初には、早くも海岸傳ひに奥州に入つて、津輕南端の木蓮子の阪、境明神の前に立つて遠望して居ます。是から先の紀行は「率土が濱風」と謂つて中道等君の研究にも發表せられて居りますが、津輕は其前々年の天明卯年が大飢饉であつて、澤山の窮民がさまようて路傍

に死にました。どこをあるいても草の陰に累々たる白骨が見られ、おまけに此秋も風雨ばかり多くて、人心が恟々として居るさ中へ、何も知らずに入り込んで往つたのであります。青森の善知鳥神社に詣つて蝦夷渡海を占つて見ますと今は凶、三年を待てとの御告げがありました。然らば此間に奥州を一巡りしようと思つて、淺蟲から小湊の近くまで行きますと、餓ゑたる漂泊者の群が眼も當てられぬ姿をして、わや／＼と岡を越えて來るのに行逢ひました。その凄愴の光景は日記の中によく描かれて居ります。それで又計畫をかへて再び弘前まで引返し、やがて碓が關陣場を越えて、同じ月の末には更に比内の山村に入つたのであります。

大館には是を第一回として、後年幾度となく立寄りました。百数十年の後に、精彩に富める彼の紀行が、縁あつて永く此町の教育財團に保存せらるべきことを、少しも想像し能はずに、せつせと筆を動かして居たのであります。それから鹿角を抜けて北上の水域に出た後の話は便宜上あと廻しに致しますが、兎に角に此時から十七八年は、南は仙臺石ノ巻から北は松前江差までの間を、二年三年と切つて轉々してあるいたことは、悉く現存の遊覽記に由つ

て窺ひ知られるのであります。其中に蝦夷地の雪の底で僅かな借屋幕しをしたかと思ふ外は、大部分は人の家のかゝり人で、最も年久しく往來して居たのが、西津輕深浦の竹越貞政の家でありました。此家は一家残らず俳諧がすきで、又可なりの物持でありました。享和元年の冬、眞澄四十八歳の年に、愈々津輕を引上げて再び同じ濱づたひに、岩館椿を過ぎて能代から土崎に入つた時にも、その竹越家の主人は同伴して、とう／＼年の暮近くまで、二人は土崎に居りました。或は海上の交通から此港に知合でもあつて、其紹介の爲に同行して來たのかも知れませぬが、能代でも土崎でも早く懇意な人が出來て、何れも後々まで可なり親密な交際を續けて居ります。

土崎での宿はヲバタ屋といふ問屋でありました。其前暫く箭守某といふ人の家に世話になつて居ましたが、是は能代で始めて逢つて知合ひになつたと記して居ります。しかも其家へ深浦の竹越氏も、能代の伊東氏も共に遣つて來て、永いこと遊んで居ります。あの頃の社交には今の人の想像に及ばぬ様な悠長な處があるやうであります。さうかうして居るうちに追

追歳の暮に近く、港の町も忙しくなつたものか、師走の中ば過ぎ、雪を分けて漸く秋田の城下に入つて來ました。以前一度來てから、ちやうど十七年目であります。鐵砲町の石田某の家に宿すとあります。暮の二十九日から町に年の市が立ちました。それを見に出て丹念に賣り物の名を書留めて居ります。春のまうけの色々の家具食物などからも、其時代の生活は窺ふことが出來ますが、雪國で無くては名も聽かぬシンベゴンの菓の靴、さては神佛に供へる料に、紅葉や青木の枝の乾物にしたのを賣りに、村の女たちが出て來るといふ光景などは、他縣の我々が讀んでもなつかしい過去の記録であります。今も其通りであるなら由緒の久しいことが考へられ、もはや改まつて居るならばその變遷の跡が尋ねて見たくくなります。私は秋田の諸君が今まで此方面の近世史を、閑却して居られたことを不思議にさへ感ずる者であります。

## 花の出羽路

眞澄翁の旅行生涯は、是から後の約十年間が、最も自在なる圓頓境でありました。二十篇に近い遊覽記中の傑作は、幸ひにして略完全に元の形で保存せられ、現に本日の展覽會にも出陳してありますから、茲に一々の叙説を試みることは見合せますが、單に故人に對する追慕の情からで無く、寧ろ我々の新たなる生活の爲に、是非とも今日の如き機會に於て、皆様と共に考へて見たい點が幾つかあります。殊に私等の推服して措かざる特色は、第一には翁の元氣、旅行心とも名づくべきものゝ旺盛であつたことであります。例へば秋田に戻つて來た翌年四十九歳の春は、翁は北秋木戸石村の村長佐藤吉兵衛信氏といふ人の家に居たことが、「繁き山本」に書いてあります。三月の初に茲を出て藤琴川の流を上下し、七座高岩の諸山を登拜し、それから險路を越えて太良の鑛山を訪ひました。當時の山主は成田某で、其家の大きな臺所に雜人と共に一宿したともありますが、主として世話をしたのは山田といふ在勤の醫者でありました。詳しく一山を見物して、山稼ぎの模様までが精確に繪に描かれてあり、

又働く男女の歌や生活ぶりが寫してあります。永く此事業に携はつて居た人々の記録にも、恐らくあの鑛山の百年前の盛況を、是ほど具體的に書残したものはあるまいと思ひます。それよりも驚くのは同じ年の十一月、阿仁の雪中に在つて、處々の山村を徘徊して居ることです。是が尋常の遊歴文人ならば、出てもあるかず、第一こんな山奥へ入つて行く筈もありません。十二月の四日に一の又を立つて、白絲瀧を見物に往つたなどは、えらい冒険でありました。三人の男を雪踏みに頼んで、瀧の根もとまで近よつて見物しました。勿論世に聞えた名勝ではありますが、其雪中の壯觀を記述するに至つては、けだし空前絶後の筆であらうと思ひます。しかも此翁には津輕でも暗門あんもんの瀧の遊覽記、又八郎湖畔の吹雪の紀行などがあります。それから年次は不明ですがつと年を取つてから、十二月の十日に五城目ごじやうめを立ち、山内やまうちを通つて中津入に越えた日記が、「雪の山越」と題せられて残つて居ります。又寺内の鎌田正家まさけ、土崎の岩谷貞雅まことなどを誘ひ、那珂通博翁等と共に太平山に登つたのも、盆の頃ではありましたが、年はもう五十八九歳の、文化八年以後のことでありました。永い間の險難風雪

に鍛へられて居たとは言ひながら、必ずしも天性頑健の人で無かつたことは、屢々風を引き腹を痛めて寢込んで居るのを見てもわかります。全く氣力が人並にすぐれ、又次から次へ新たなる知識を得ようとする志が之を促したものであります。

今日世にもてはやされて居る多くの紀行文を見ましても、風光に忠誠なる旅人は概ね人事に冷淡であり、一方には習俗の奇を愛する者は、おのづから山水に背を向けるのが常であります。花を賞し湖山の月雪の美しさを描いた眞澄翁は、同時に又深い興味を常人の生活の上に寄せて居ります。殊に遠國の異風に目を著けた人々は、大抵は還つて之を都市の民に語り、笑ひ興するのを目的とし、従うて地方限りの故事由緒などは、如何に熱心に説き聽かされても、輕々に看過するのが通例であります。夙に故郷に歸ることを斷念したらしき我が菅江氏は、全く特殊なる心境を以て、さういふ話にも耳を傾けて居ります。當時の秋田縣人の祖先に取つて、是は誠に張合ひのある話相手であつたに相違ありません。自分が敬慕する第二の點は、此人の旅中の學問であります。眞澄が始めて郷里を出た年は、古事記傳の上卷

の部が完成したよりは三年前、河村氏の書紀集解が出来るよりは二年前でありました。日本の國學は言はゞ彼が奥羽を漂泊して居る期間に、追々に成熟したのであります。考古學の方面から見ましても、我々が一つの目標と見て居る屋代氏等の「道の幸」、又は藤井貞幹の好古日小録の世に出たのは、何れも彼が南部津輕で暮らした寛政年間の事であります。尤も新井白石の集古圖説などは、四十年餘り前に出版されて居ますが、假りに以前の博覽が幸ひしたとしても、さう若い頃の記憶ばかりを頼つて居るわけには行きませぬ。東北の田舎に少數の篤學者があつて、いち早く中央の文學を受入れたといふことも感心であります。眞澄翁に至つては所謂庶燠かなるに暇なき流寓の身を以て、いつの折にか行く／＼之を利用し得たのであります。固より天稟の強記を以て、能く歴代の古文詞章を暗んじたことも確かでありませぬ。しかし文化二年にやつと前編を印刷した谷川氏の和訓栞までが引用せられて居るのを見ると、日記の中には少しも現れて居ませぬが、翁の修養は行路頭に於て行はれて居たのであります。津輕時代の後期に於ては、翁は本草物産の學者として、朝野の醫家から欽慕せられ

て居りました。秋田に移つて後もなほ暫らくの間は、友人保護者が此方面に多かつたのであります。それが追々上古中世の歴史、それから進んでは今日の考古學、即ち遺物遺跡の研究に向つたなどは、單に才人の才智を應用して、凡俗を驚かしたものと解することは出来ないであります。

勿論之を以て時代の機運とし、翁も亦其潮流の上に乗つた一人だといふことは出来ます。所謂訓詁傳誦の古風が、次第に實證の方法に遷り、曾ては臺閣の間に局限せられた學問が、伴を民間に求めて現前の生活に其對象を捕へようとしたことは、江戸にも京にも既に顯著なる傾向でありました。獨り奥羽が邊土なるが爲に、永く其空氣の圈外に止まり得なかつたのは當然であります。しかも他の多數の先輩が、必ずしも外間の促迫を感ぜず、しばしは舊態に安然たることを得た時代に、一種境涯の最も數奇なる學徒が、縁あつて久しく此地方に放浪して居たといふこと、及び其志願とする所であつたと否とに拘らず、友を公人の地位あり名望ある者に見出すこと難くして、専ら草澤の間に止住して古を懷ひ今を營んで居る人たち

と、交り且つ懇ろに思想を交換するを得たといふことは、今日に於て回顧して見ますれば、どれ程この縣の學問の爲に、有意義であつたか知れぬのであります。

是を或は一種の性癖の如くに見る人も有りませう。又先生をして異郷に客死せしめたる未可解のローマンスと、結び付けて考へようとする者も出て來るかも知れませぬ。併し兎に角に眞澄翁が花やかなる人事を避け、田舎と其天然とに偏愛を持つて居たことは事實で、しかも其愛情は利害を超越したものであります。それが何に基づいて居たかは推測し難い問題であります。自分の今の心持で考へて見ますと、多分は知るに連れて親しみが深く、殊に微々たる者の無心なる悲運、主張せざる要求とも名づくべきものが、特に孤獨の心を動かし、此の如く何等期する所なき友誼を抱かしむるに至つたのでは無いかと思ひます。何にしても此態度は、晩年の「雪の出羽路」、「月の出羽路」の文彩の中にも一貫して現はれて居ります。南北秋田郡などの諸君は、眞澄翁の風土記が餘りに遅く始まつた爲に、終に自分たちの地方に及ばなかつたことを残念に思はれるやうであります。私の見た所では様式こそちが

へ、「花の出羽路」はこの遊覽記の十幾編によつて、とくの昔に殆ど完成して居るのであります。翁の足跡の及ばなかつた區域は仕方が無いが、この大河の流の末、鴻を取圍んだ濱邊山邊の村々の生活は、寧ろ情趣に富んだ花月雪若葉の四時折々の背景の中に、是以上如實には描き出せぬと思ふ程度に、活き／＼と現はれて居るのであります。通例埋没して些かの痕跡を留めないものゝ生活が、特に彼等を愛した人の親切なる觀察によつて、今も其後裔の爲に百年の後まで保存せられて居るのであります。

#### 長處は終に認めらる

さうかと思ふと他の一方には、雪月の出羽路をも總括して、眞澄遊覽記と呼ぼんとする人も少なくはありませんでした。遊覽記といふ書名は元來筆者自身の案出したもので無いと思ひますが、當地では久しく此名を以て知られて居ます。佐竹家が老後の菅江眞澄に六郡の風土誌を囑託せられた時の事情は、私の寧ろ秋田の學者から教示を得んと欲する點であります



が、兎も角も既に數十卷の紀行は世人に認められ、終に一部を淨寫して天樹公にも献じた後でありますれば、彼が如何なる態度用意を以て、各邑の實情を視察する人であるかは、ほど關係者には察せられて居たのであります。即ちその所謂遊覽記式の筆致文彩が、少しでも弘く未だ行き到らざりし仙北平鹿等の村々に適用せられんことを期したので、其結果として、今日假に未完成であらうとも、斯ういふ異色ある大きな地誌が残つたといふことは、自他の本懐とする所であつたらうと存じます。

地方誌編述の一時風を爲したことは、遠き養老の昔を始にして、前後四回ありました。雪月の出羽路は恰もその第三次の流行であり、其後では大正時代の記念出版が第四次であります。舊日本五百數十郡のうちで、三百以上の郡は近年になつて、大小それ／＼の郡誌を公けにしました。一方には交通の改善に伴ふ案内記からの刺戟、他の一方には修史局系統の史學の影響でありませうが、何にしても後代の眼から見て、之を大正文化の一特徴に算へることは疑ひがありません。この大正期の郡誌の編輯には、種々なる氣質趣味、又種々の能力の人

が之に參與しましたが、大體に於ては割據孤守の癖が止み、家々の記録文書が次々に公開せられざるに伴ひ、主として之に基づいて地方の舊事を明かにしようといふ學風でありました。が爲に、此調査の恩澤を受ける者には甚だしい運不運がありました。例へば京鎌倉に近く且つ屢々戰亂の衝となつた地方で、先祖に武功の士あり且つ火災水難によつて系圖感狀の類を失はなかつた家は、一朝にして百代の譽を世に布くことを得ましたが、事情の之と異なる大多數の平和無事なる舊家名門は、有れども省みられざる姿となりました。或は近世の武邊咄流行の頃に書かれた誇張に満ちたる軍記類なども、史料乏少の餘りに忍んで之を取入れませんでしたけれども、如何せん出羽奥州の邊隅に於ては、文筆は僅かに三百年以後のものであつたのみならず、其用途は殆ど徵收と訴訟とに限られ、尋常農民の日常の生活に至つては、何等紙片の之を跡づけるものも無いのであります。此實狀に在つて、範を中央の政治史文藝史に採つて、地方の沿革を傳へんとした者が、苦惱すべきは固より其所でありまして、要するに志あつて手段方法の之に伴はなかつたのが、近年の郡誌の通弊でありました。尤も其中には

此縣の河邊郡誌などの如く、頗る書外の資料に著目して、現前の事相に據つて前代の生活を推測しようとしたものもありましたが、他の百中の九十は寧ろ偏在する遺文に繫縛せられて、自分々々の當然の昔をさへ、描き出して見ることが出来なかつたやうな有様であります。

## 偶然記録の價值

殊に所謂郷土史料の搜索に當つて、受負仕事の郡誌編纂が、往々見落してしまふ大切な材料は、私たちが名づけて外部記録又は偶然記録といつて居るものの中に多いのであります。日本總國の歴史に於ても、松下見林の異稱日本傳、それからすつと後れて山本北山の日本外志などが出てからは、學者の物の考へ方が著しく變つたのであります。最近にも異國叢書などに於て、歐羅巴人の見聞録の類が段々和譯され、それを讀んで見て始めてはつと心付くことは中々多い。勿論澤山の誤解はありますが、それに警戒することは我々には何でもありません。それよりも内側に居る者が見馴れ又有りふれて、書き傳ふるにも足らぬと思ふ平凡事

が、實は意味深いものであり、もしくは知らぬ間に推移つて、後々は自分も忘れてしまふことが、却つて慣習圏外の人の注意によつて、漸く之を復原して自省の手掛りとする場合は多いのであります。而うして奥羽は古くから眞澄翁の如く、中部地方から運げ込んで年月を送つた人は澤山にあつたのですが、彼等は何れも世棄て人で、還つてそれを誰に告げようといふ張合ひも無く、又他人からも要求せられなかつたのであります。だから永年心がけて居ても、さう多くの地方資料は得られません。私などの知つて居るものでは古河古松軒の東遊雜記とか、遠山甲斐守の未曾有記とか、稍忠實に道途の見聞を録して居るのみで、其他は斷片的な橋南谿の東遊記や、桃井塘雨の「笈の埃」の類がありますが、是等は皆近世のものばかりであります。秋田附近の記事としては、御承知かも知れませんが、伴蒿溪の閑田次筆の中に、「雪の古道」と題して此邊を冬季に旅行した江戸人の話が採録してあります。あれは津村正恭の日記であつたことが、此頃になつてわかりました。紀行は大抵春秋のよい時候のものが多いのに、是などは珍らしい一年間の資料であり、ちやうど眞澄翁が一度來て、二度目

に立戻つて来る迄の中間、即ち天明八九年頃の此地方の事實を傳へて居るのですが、しかも其見聞は通り筋の左右だけに限られ、自由自在に里から里へ、野路山路を越えてあるいた眞澄翁後年の日記の、精且つ豊富なるに如かぬのであります。この津村正恭の譚海といふ隨筆も、前年國書刊行會から出版して居ります。此人は因縁あつて秋田及秋田人と往來し、從つて若干の此地方の舊事を手記して居りますが、もと／＼好事を主とした著述であります故、一端を以て全般の狀を類推させる力は、亦遙かにこの旅行家には及びませぬ。

それから次には私の謂ふ偶然記録の價値であります。今日でこそ誰でも「西鶴に現はれたる宗教觀」とか、「川柳から見た政治思想」とかを平氣で論じますが、斯ういふ他に一種の目途ある文藝などが、歴史を語るものとは元は何人も考へなかつたのであります。江戸期も稍終りに近づいて、民間の篤學者たちが、始めてこの心持を以て過去の雜書に注意しました。しかも之を唯一つの證據として、數百年來の所謂市井の生活が、追々に明らかになつて來ました。といふわけは昔から今に至るまで、特に平民の歴史を世に傳ふべく、述作せられた書

籍などは一つも無いからであります。骨董集とか用捨箱とかいふ類の事業は、研究そのものよりも寧ろ着眼と態度の親切を採るべきもので、其中でも喜多村筠庭の諸考證は、我々の尊敬する所であります。しかし斯ういふ方法の應用せられるのは、おのづから區域が限られて居りました。文藝はもと都市に起つたものなるが故に、其記述のたとへ偶然にもせよ、田家の生活に觸れたものは至つて少ないので、自ら田園文學と稱しつゝ、其實は皮一重の、強ひて風雅を求むる類が普通であります。固より文藝としてはそれで立派に成り立つて居るのでせうが、我々は到底この繪にかいた天堂地獄の圖の如きものゝ中から、間接に各時代の鄙人の實相を尋ねて見ることは出來ぬのであります。

### 忠實なる記述

此地方に於ても恐らくは他日、所謂農民心理の由つて來る所を詳かにする爲に、今少しく何か適切なる偶然記録が残つて居りさうなものと、尋ねまはられるやうな時が來ることであ

らう。眞澄翁の著作は文學として決して上乘のもので無く、又本來の對社會的使命といふべきものも無い、至つて自由なる吟詠の旅ではありましたが、元來多感の性が更に孤獨によつて尖鋭となつて居たに加へて、言はず知識を唯一つの情欲とし、描寫を専門の技術として、久しい間この小天地に埋没の生を營んで居たのであります。假に之を漫遊者の漫筆として輕に付し去らうとなされても、事實今昔を一貫して羽後人の日常の艱苦、諸君の父祖が曾て経験した退屈と興奮とを、是ほど微細に且つ明確に、世に傳へた記録は他には無いのであります。先生が老いてなほ雄物川上流地方を巡歴して居られた頃、江戸では屋代弘賢石原正明などといふ一派の學者たちが、「風俗問狀」と題する百餘箇條の質問事項を印刷し、之を諸國の知人に配付して答へを求めました。地方人は悠長で今に／＼と言つて居るうちに、尋ねた人々は相次いで黄泉に赴き、現在其答書の世に傳はつて居るものも、僅か十指を屈するに過ぎませぬが、是が我々の携はつて居る民俗學の東雲でありました。たとへ若干の不備遺憾はあつても、今となつては貴重な比較資料であります。久保田ではたしか前に申した那珂翁な

ども關係せられて、秋田領風俗問狀答書といふものが出來ました。見事な澤山の繪を添へた綿密な記述であつて、備後の福山領で菅茶山翁などが參與して作つた答書と共に、私は之を東西の雙璧と認めて居ります。併し此方は六郡の都邑を通じて、最も花々しい年中の行事を、半ば公けの計畫を以て記述したものであります上に、事實は記憶と傳聞との綜合になつた例といふに止まつて居ります。之に反して菅江翁の日記は一局部ではありますが、兎に角具體的な見聞録であります。例へば「芒の出湯」は享和二年の正月から五月まで、北秋田の大瀧に在つて遭遇した節供祭禮の實況であります。「鄙の遊び」は文化六年の七月、八郎湖岸の村に居て目睹した眠流し・盆市・盆踊り・番樂舞等の記事であります。其他男鹿半島の濱の正月でも、さてはずつと以前に雄勝の村で見た春の祝言や婚禮の作法でも、何れも用事の無い行きずりの客として、醒めたる心境と人のよい同情とを以て、脇から觀察して居た覺え書であります故に、其光景は生動して居ります。我々は之を遠く隔たる國々の異同と對照して、殊に無限の興趣を認めるのでありますが、同じ一つの地方としても、中年の人たちの一代の經歷

の間に、世相は早くも驚くべき變遷を見ようとする今日、それが百二十年三十年の過去に於て、如何なる外形と印象とを伴なうて居たかを知ることが、又特段に意義のあることと思ひます。其上に此等の記録は、獨りある限られたる時間の緊張と興奮とを説くに止らず、其前後の長い月日に渡る待遠しさと楽しみ、又は夢のやうに過ぎた跡の疲れや反動的寂寞、もしくはさういふ常の日の單調に堪へかねる人々の、酒飲み歌うたひ笑ひ巫山戯て、それを紛らして行くやうな事情にまで、秋田には又秋田らしき特色があつたことが、この旅人の所謂遊覽記につて、始めて其一面だけを窺ひ得られるのであります。

雪月の出羽路は日録でないから、勿論其様な個々の出來事に迄は及んで居りませぬが、それでも其内容の大部分が、一旦は必ず筆者の體驗を経たものであることだけはたしかです。是は申す迄も無く此種の述作として普通の例ではありません。均しく前代の風土誌と謂つても其成立は決して一樣で無く、其中でも最も精確と稱せられるものは概ね官府の事業であつて、従つて無味乾燥の非難を免れませんでした。久保田領では御承知の通り、既に數十年も

以前に周到なる郡邑記の編纂がありました。時は少しくそれよりも後れて、仙臺藩にも同種大規模の計畫が起り、田邊氏の封内風土記なども實は衆力を集めたもので、資料は主として村々と社寺との書上げであつたやうであります。幕府領のものは文化以後の事業で、量に於ては優に各藩を壓するに足りませんが、其結果に成る所の御府内備考・新篇武藏風土記稿・新編相模風土記を見ますと、ほど亦大正時代の郡誌と同じく、言はゞ所在の役人が、公けに發表して可なりと認むるものを整頓したに止まつて居ます。之と對立して一人の篤志家が多大の日時を費し、身没して業は尙未だ完からずといふものは、一方に恕すべからざる缺漏はあつても、著者の力量次第では、獨自の觀察と見解とを世に傳へることが出來ます。私の知つて居るものでは能登名跡志、それから莊内の安部氏の三郡雜記の類は、確かに身親しく筈を其境に曳いて、さうして後に古書の據るべきものに從うて居るのであります。眞澄翁の地誌も此系統のもので、しかも最も計畫的な又道楽味の薄いものであります。村々の書上げを唯一の資料とする郡誌、多數の協力はあつても一人の氣魄は透徹しない風土記を持つ者が、そ

れには満足せずして更に我が菅江氏の如き、聊か不羈獨立に過ぎたる調査者に、自由なる改造を委任したといふことは、たしかに雅量であり又欽慕すべき此藩の學風でもありました。獨り當代に入つて却つて自ら矜持し、是ほど歴然たる異郷人の長處を、少しも善用せざらんとするが如き意見が行はれるならば、それは少なくとも祖先の志に反するものであります。私の解する所では、秋田に於ける眞澄翁の百年祭は、是非とも斯ういふ心持を以て、將來に記念せらるべきものであると思ひます。

## 文品と思藻

是で先づ大略私の兼て諸君に向つて述べて見たいと思つた要點は盡きましたが、なほ一二是と關聯して、斯ういふ機會に於て御話をして見たならばと思ふことがあります。私は明治の末年頃に、始めて故人山方香峰君から眞澄遊覽記のことを聞きました。後に承はれば秋田では、其頃八十年の年回なども營まれ、引續いて此翁の名は高く揚がつて居たのであつた。

遺著は固より所謂斷簡零墨の末に至るまで、之を獲て珍重する人は可なり多くなつたさうです。しかしそれにしては私の不審に思ふのは、今まで一向に是ほどの名著を利用しようとした者の無いことであります。遊覽記の名は古くから世に知られ、稀には其二三を援引した人もあるに拘らず、最近の南部叢書の中で五六卷の略本を印行し、今度深澤君等が秋田叢書に其一部を入れようとせられる以外には、まだ之を世に出さうと企てた話も聞きませぬ。是に何か曰くのあることと思つて居りました。

考へて見ますと、眞澄遊覽記の出版の困難であつたのは、一つは彩色畫の多いためですが、今一つはあの文章が今の時代に向かぬことも、確かに斯ういふ冷淡ではない人の間に、なほ人望の得にくかつた原因であらうと思ひます。單に天明寛政の頃の國學者の常の風といふ以上、菅江翁の文章には癖があり、又學殖が現はれ過ぎて居ります。故事といふよりは出典ある用語法、讀んで聽かせて更に註釋をしてやらぬと、相手には解らぬといふ類の言ひ現はしをして居たことは、確かに大なる缺點と言つてよろしい。其上に時々是我々にも氣の付く

文法の誤りがあつて、可なり快讀を妨げるのであります。今日もし此様な文章を書く人があつたとしたら、それは物ずきであり又確かに悪趣味であります。考へて見なければならぬのは、眞澄翁には限らず、此時代此境遇に在る人には、これが唯一の文體であつて、日常の用としては此以外には、御座罷在の候文があるばかりであつたのです。

私は寧ろ斯くの如き囚はれたる文體を以て、何等の凝滯も無くよくあれだけの多思多感を、自由に表現し得たことを敬歎するの他はありませぬ。江戸でも當時此通りの文體は弘く行はれて居ましたが、大抵の文人は取材の選擇と構想の單純化を以て、強ひて内容の側から調和を試みて居ました。即ち如何なる題目でも如何なる境涯でも、悉く此文章を以て處理するといふわけには行かなかつたのであります。勿論漢文にも同じ拘束はありました。林道春や黒川道祐の如き初期の學者の、何でも書くべしとした人々は、吾妻鏡以來の日本流に従うて、支那人には讀めぬやうな漢文を平氣で書きました。其後漢學が進んで追々に其あらが氣になるやうになると、却つて書く種の方を制限しようと力めた者も多かつたのであります。そん

な事では仕方が無いといふ世の中になつて、氣力ある青年は文章の力を養ひましたが、其修業の方法は多くは旅行でありました。眞澄翁の和文も恐らくは是と同様に、旅が其技能の發達を強制したのでありませう。兎に角鍛錬の功専念の力かは知らず、外から見れば窮屈至極なあの文體を驅使して、如何なる鄙俗の話題でも、遺憾なく言ひ表はして居るので、一度でも文體の爲に描くべきものを描き残したらしい形跡の見えぬのは、我々共の常に羨ましく思ふ所であります。此點は翁の手に成つた繪の方も全く同じで、要するに根氣と親切とを以て、あの簡単な繪具と普通の細筆だけで、あれだけ非凡なる寫生畫を製作したのであります。本日の展覽會でよく御覽になつたことと思つますが、あの美濃判半切の薄葉に書いた明德館あります、あれが例の天樹院様に献上したものであると見えまして、文字も他人の淨寫したものであるらしく、畫は悉く玄人の手に成り、田中重遠又は寧叡等の落款があります。この二つを比べるとよく分ることは、翁の繪は確かに習つた繪ではありませぬ。後年は自畫賛



の幅をかく迄の自信が出来たやうですが、布置構圖に少しも法則が無く、もし所謂胸中の雲煙がありとしますれば、それは直接に自然を師としたものであります。元來器用な人であつたことは確かですが、それよりも何とかして眞實を寫したいといふ努力、それが積み重なつて末には多くの苦勞無しに、あゝいふ何人にも企てられぬやうな、無邪氣な逸品を世に留めることが出来たものと思はれます。

文章の方も全くその通りでありました。あの眞書を以て山水を描くやうな手つきで、能く是だけの精彩を發揮したのは、言はず一細點をも惜まざる自然に對する忠誠であります。學ばなければならぬ心法であると思ひます。先生は元來幾分か眞面目に過ぎ、或は氣六つかしいといふ質の人であつたらしいにも拘らず、あの文章の中には屢々微笑を催すやうな滑稽がありました、それが始終この古風なる描寫法に活氣を興へて居ります。拾つて行くと數限りもありませぬが、かの「雪の飽田根」の一篇の中にも、例へば阿仁の小瀧といふ村は、一村の者が皆文筆に疎い爲に、此地方の風として多少の讀み書きの出来る者を外から傭ひ入れて、

それを算用師と謂つて居りました。芭蕉の七部集の誹諧に

此里の廣きに醫者のなかりけり

算盤置けば物知りといふ

ともある如く、それがたつた一人の村の學者でありました。然るに今宵測らずもえらい人が來て泊つたといふので、村長は早速算用師を喚んで相手をさせる。其光景などは目に見えらるやうに書いてあり、後にその男が一句を作つて書いて出したといふあたりは、今もありさうな微細なる人間味であります。それから湯の臺といふ寒村では言ひ様も無いあばら屋に一宿した。然るに夜深く迄板戸の向ふで、ばち／＼と碁を打つ音がする。さても意外なたしみと思つて後でよく見ると、それは家の小兒が寝ながらハッパミの實を咬む音であつた。又森吉山下の森吉村では、冬のさ中に一軒も夜具のある家が無い。何れも藁を褥として居るのであるが、中には湖上の何藻とかいふ水草を採つて來てよく乾かし、その中に眠ると至極柔かで温かい。亭主戯れて藻夜著の蒲團といふなどゝあります。「繁き山本」では寒屋澤の山



村に於て遠國から來て居る不幸なる老婆に、歌をうたひよく戯れ言をいふ者が出て來ます。土地の人々が之をゴツチャバ、と綽名して居るなどは、をかしい中にも私は涙がこぼれるやうに感じました。其他大瀧の宿屋に滞在して居りますと、マタギが何人も門前を大話をしながら通る。其言葉には彼等の風采までが想像せられます。四月に入ると村々に農事が始まるので、湯宿の女客が酒を飲んで別れの宴を催し、こんな歌をうたつて居ます。

けやく離れとお庭の草こ、

うらこア枯れても根こは枯れない

果して今日でも、是に近い心持が続けて歌はれて居るかどうか。なつかしいことだと思ひます。之を要するに遊覽記の文章は、正直に評して悪文の中に屬すべきものでありますが、我同情者の眼から見れば、かゝる手筒なる道具を使用しても、なほ是だけ鮮麗にしかも感動深き記録を仕揚げ得た筆者の天分を、讃歎せずには居られぬのであります。

## 半生の秘密

最終に尙一つ、思ひ切つた私の批評を申しますと、眞澄翁の歌には殆ど一首として名歌がありません。單に凡庸だといふのみで無く、其吟詠の態度にも、文章の方に現はれて居るやうな眞率味がありません。當地にも大分短冊などを珍重して居られる人が多いやうですが、手跡までは彼是申さぬとして、其歌が些しでも感服しないのであります。この程度の歌よみならば、あの頃江戸にも京にも實はあり過ぎる程ありました。強ひて感心するならば即興の輕捷、千首萬句口を突いて出るといふ點で、之を要するに唱和の雄でありました。勿論我邦には久しい間、單に達者に三十一文字を連ねるといふことを以て、高名になつて居る人が幾らもあります。古いところでは頓阿法師の草菴集などが其一つの例ですが、分量に於ては及び難いといふのみであり、もしくは何れも難が無いといふだけで、たとへ五十首でも其中から今の人を感動せしめるやうな歌を、抜き出さうとすればそれは不可能なのです。しかし相

對して應酬を事とする者の心境は又別であります。殊に我々の間には傳統がありまして、雅語を五七五に排列するの技能を重視して居りました故に、それが到る處萬人の尊信を博し、従つて遊歴の資となつて居たことには少しの不思議も無いのであります。がそれに致しても今日遊覽記の卷々を通讀して見ますと、どこでも同じやうな風月の興、人の情のうれしさと旅人の愁ひを、定まつた様式格調を以て五十年間繰返されなければならなかつたことが、如何にもこの孤獨の人の氣の毒さを思はせるばかりであります。尤も是も考へ様次第で、立花や香、茶の湯音曲などの風流に關しては、誰も時を異にした單調を非議する者は無いのでありますから、先生が生涯之を職業として、あの安定せざる生活の間で、能く是だけの功績を擧げられたことも、所謂歌の徳と解することは出来るのであります。さうして斯ういふ古風の考へ方をする者は、あの時代は勿論、今でも決してまだ少なくは無いのであります。

私は寧ろ斯ういふ方面から、現在まだ全く霧霞の中に包まれて居る菅江眞澄翁の青春時代、即ち三十歳にして國を出て終に還らなかつた不思議な經歷を、窺ひ知らうとして居るのであ

ります、翁の傳記の殊にロマンチックな一節、たとへば一生釋き得なかつた「常被リ」の謎、或は加賀様の御落胤といふが如き馬鹿げた風説なども、單に俗衆の好奇心を満足せしめるといふ以上に、其内側に潜んで居る社會的意義、殊に今日の文化の精巧なる綾紋様の色糸として、是非とも元の筋を探つて見る必要があるのです。翁の故郷を尋ねて久しく苦心して居る人々は、或は何か隠れたる動機があつて、故意に出自を隱晦にして居られたのでは無いかといふ疑念さへ抱いて居ります。私も遊覽記の各卷を見る際に、特に此點に注意して居りましたが、成るほど三河の人といふことのみは一致して居ますが、村の名は乙見里おとみのとか入文いづみとか色々書いてあつて、少しでも手掛かりを與へませぬ。氏名を改めるといふまでは、斯ういふ境遇に在る人の往々にしてすることですが、或はそれ以上に身の上を包み、幾分か臆測の餘地を存せんとせられたのではありますまいか。もしさうだつたとすれば、かの法外なる落胤譚の如きも、自身其作者で無いことは固よりながら、少なくとも其訛傳を放任して居た弱點だけは、一部分之を先生に歸せなければなりません。

## 故郷の消息

私は去る大正九年の秋に、三河へ旅行して始めて眞澄翁の遺跡を探つて見ました。乙見といふ村は額田郡東部の丘陵の間にありますが、其邊には白井といふ苗字は一軒もありません。をかしいことには近世菅江眞澄といふ相應の國學者があつて、現に其未亡人が老いて岡崎に住んで居るといふことを教へてくれた人もありました。菅生は岡崎附近の古い郷名で舊社があり、それに因んだ小川の流れもあります。菅江といひ眞澄といふ氏名も、全く是から思ひ寄られたものと察しました。しかも後に秋田寺内の墓誌などによつて、漸く渥美郡の方であらうと考へるやうになりましたから、轉じて豊橋の周圍を物色しますと、此邊には白井といふ苗字が處々に部落を爲し、紋も梅鉢を附けた家が幾らもあるといふので、今度は其中のどれがさうであらうかを決するに迷ひました。現在其家が連綿として居たところで、今では既に姪曾孫が姪玄孫の代になつて居ります。若くて出た人だから記憶が薄らげばそれきりで、

碑文や過去帳を捜す場合とはわけが違ひます。そこで據ろ無く遊覽記等にある村名には構はずに、片端から白井家の多くある渥美郡の村々を當つて見ようとしたのであります。秋田では鳥屋長秋氏の子息某、翁の没後に上方に旅行をして、路次に翁の生家へ立寄つたといふ話も傳はつて居りますから、街道筋からさう深くは入込んで居らぬ村であつたらうかと思ひますが、東海道に臨んだ村では、東では二川驛の大岩、次には豊橋郊外の花田、それからもう隣郡になつて居りますが、豊川對岸の下地などに白井家が多くありまして、其中でも花田は今日豊橋の市中に編入せられ、ちやうど停車場のある邊りが元の屋敷地ですから、住民は非常に移動して居ります。こゝがもしその場處であつたら、愈々尋ね出すことが困難なのであります。

ところが是も大正九年の九月の事でありませんが、私は秋田の圖書館に参りまして、岡先生の御親切で始めて眞澄翁三十五歳の年の紀行「配志和の若葉」といふのを讀んで見ました。是は今の陸中の前澤附近に居られた頃の日記で、南部叢書として其後印刷になつて居りますが、

其中に村井良八氏も引用せられた一節、即ち毛越寺もうせつじの僧の京登りをする幸便に托して、「あが父母の國吉田のうまやなる殖田義方のもとへ」文通したところが、けふ其返事が届いたといふ記事があります。單に父母の國吉田とあるだけでは、豊橋に生れたといふ證據にはならぬが、兎に角豊橋に殖田といふ家があるか無いかを先づ聞合せて見ますと、幸ひなことには其家がちやんとあつたのです。遠州の方から古く移住した名門であつて、維新前から郊外の新田を開いてそこに居住して居ますが、更に好都合なことには此家の家風として、古い書き物は一枚も散らさず大切に保存してありますので、其中には必ず先代の日記書狀類の、眞澄翁家出當時の事情を書いたものが残つて居るだらう。捜して見て下さいと頼んでありますが、ぼつり／＼材料が現れて來るのであります。この義方といふ人はよほど丹念な物固い人であつたと見えまして、最初に見付かつたのは美濃紙に包んだ薄の穂が一本、上書には天明七年十一月七日、陸奥眞野萱原の尾花、白井英二生より送り來るとあります。御承知かも知れませんが眞野萱原まきのくさばらは萬葉集以來の歌名所でありまして、其故跡と稱するものが奥州には數箇所

ある中に、一番弘く知られて居るのは今の宮城縣石ノ巻湊の附近に在るものであります。天明七年といふと前の毛越寺の僧に狀をことづけたといふ記事のある年でありまして、ちやうど其夏以後の日記は缺けて居ります。最近始めて大館の栗盛財團の文庫から出た二つの日記に依りますと、天明六年は歳の暮まで、眞澄翁はやはり陸中の前澤山の目の間に居られ、天明七年の春夏も、同八年の正月も共にこの附近で迎へて居られるのですが、中間の約半年だけは、どこを旅行せられたか記録がまだ見付からず、たゞ後日になつて屢々松島や仙臺の話が出るから、多分其時あの方面をあるいて居られたことと思つて居りました。其推察がたつた一本の薄の穂によつて、ほど安全に確かめられたのであります。今後は更に舊仙臺領北部の舊家を尋ねて見たら、何か新しい材料が加はるかも知れぬといふ希望を持つことになつたのであります。

次にこの同じ植田七三郎氏の家から、又斯んなものが出て來たと謂つて送つて來たのは、是も紙に包んだ鳥の羽が一枚、其上書には松前鶴の思ひ羽、天明八年十一月一日至、白井英

二贈之とあります。その白井英二は同じ年の六月に、陸中の諸詞友と袂を別ち、北上川を上りに愈々蝦夷地の旅に立つたのであります。小湊青森油川も急いで過ぎ、津輕北端の宇鉄の濱から、夜船に便乗したのがちやうど盆の魂迎への晩でありました。其夜は月照り風既に寒く、女や少年が大きな聲を揚げて、誰の父よ、その姉よと、一々亡き人の名を喚んで精霊を招くのが、たとへやうも無く身に沁みて聞えたと「率土が濱づたひ」には記してあります。而うしてこの鶴の羽は、或はさういふ船待ちの間の濱の散歩に拾つたもので、それを藏つて置いて後に松前からの音信に封じ込めたものかも知れません。植田氏のうは書にたゞ白井英二とあるのも注意を惹きます。眞澄翁にとつては植田義方は長上でありました。翁が家出の際には何かたゞがあつて、それに此人は多分先輩として干與して居たのであります。當時の日記でも出たならばすべてが明らかになることと思はれます。

## 文章と友情

それより更に我々の心を動かした発見は、やはりこの植田家の保存文書の中から、眞澄遊覽記の一部分が現はれたこととあります。それは多分寛政の十年か十一年、翁が蝦夷から還つて外南部そなんがに何年かを過した後、再び津輕の山川を細かく見てあるいた頃の紀行で、其分は秋田の方には傳はつて居りませぬ。しかも驚くに堪へたる奇遇は、ちやうど中道等君がそれと同様の自筆本を津輕の人に借りて、私に貸してくれて讀んで居る最中でありました。その本は誰かゞ後に「外濱奇勝」といふ題箋を附して、他の數篇の紀行と合綴したもので、例の通り精密を極めた挿畫が具はつて居ります。植田氏の方のは表紙も無く畫も無く、僅か一篇だけではあります。双方同じ美濃半切薄葉の用紙に、手跡字くばりまで瓜二つで、二つ共眞澄翁の自筆であります。是で見ると國を出て十六七年の後まで、なほ植田氏とは音問を絶たなかつたといふ以外に、翁には自分の紀行を複寫して、人に贈るといふ習慣があつたことがわかつて來るのであります。

山方香峯の談話で今でも耳に留まつて居るのは、遊覽記は正本が明德館に保存せられて居る外に、更に其下書かと思ふ自筆本が、一冊づつ諸方の舊家に傳はつて居るといふことです。今考へると是は下書では無かつたのであります。眞澄翁が倦むことを知らぬ筆まめでなかつたら、又自作の紀行を斯うして人に示し、もしくは寫して贈るといふ親切心が無かつたら、この大部なしかも読み易からぬ著述が、我々如き者の注意する迄に世に弘まるわけは有りません。恐らくはどこかの交情の最も濃厚であつた人の家に、祕藏せられてやがて忘れられてしまつたのでありませう。

眞澄翁は流離十年の後、松前より戻つて下北半島の一角に上陸した時にも、其行李の中に信州以來の紀行諸篇を携へて居られました。それを土地の文人たちの所望によつて貸して見せたといふことが、其後の日記に折々見えて居ります。後年秋田で學館に納められた時には、それが五十何冊になつて居たといふことです。津輕では領内の記述が餘りにも詳細であるために、之を外部に傳ふることを忌んで、彼の日記を抑留したといふ説があります。其結果か

と思ふのは、今尙秋田の蒐集中には無いものが、ぼつ／＼と出て來るのであります。(近頃秋田圖書館の手に入つた「栖家の山」なども其一つです)。又此地に傳はつて居る遊覽記の中でも「錦の濱」などは遙か後になつて、翁の手に返つて清書したものと見えて、自分でもう何年度の紀行であつたか解らぬと言つて居られます。「岩手の山」などは明かに天明八年の著であるものを、自序には誤つて寛政八年とある爲に、内閣文庫では卷次を誤まり、蝦夷に二度入つたやうな推測を人にさせて居ります。是等は皆年々の紀行が一旦は散つて別人の手に在り、後に筆者が借りて之を寫したこともあつた結果で、それが出來たといふのは、翁が路の行振りに折々の紀行を、最も關係深く又好意ある人に寄贈して置いたからであります。それも一種の遊歴人心理で、諸君の如く客を迎へて談する側の御方には、不可解なことか知れませぬが、上は賓客より下は乞食に至るまで、日本人は元來坐して他人の好意を無對價に受け得ない性情を持つて居りました。書家でも無く詩人でも無い只の男が、亭主から記念にしますと謂つて紙筆を出されると、辭し能はずして劣悪な字を書いたりするのも、言はゞ正月の

「物よし」などが、片手に袋を下げて「あゝら目出たや」などいふのと同様に、一種他郷に臨む者の土地人の好意を買ふ手段であります。眞澄翁が少しく醫術の心得あつて薬を人に與へ、或は本草物産の知識、古物遺物の研究を此地方の人に示されたのみならず、更にその貴重な著書をわざ／＼寫して残されたのも、内實は少しでも寄寓の居心地を好からしめんとする弱い心からであつたかも知れませぬが、それは千篇一律の贈答の短冊などよりは、幾ら有意義であつたか測られぬのみならず、間接には永く遊覽記の湮滅を防止して、百年の後人を裨益して居るのであります。

### 學問の系統

思はず長話になりましたが、更に今一つの發見を申し上げますと、是も植田氏から見せられた文書に、「東風俗」と題した一冊の寫本がありました。内容は古今集の東歌にフシハカセを附けたもので、前かた他でも見たことのあるものですが、其奥書が頗る注意を惹きました。手

元に其本を持たぬので日附は覚えませぬが、兎に角に最初に賀茂眞淵の署名、それを傳寫したといふ本居宣長の識語、それを又寫したといふ田中道麿の署名、それを借りて寫したといふ白井幾代二秀規といふ人の安永七年の識語があつて、次の紙には例の克明な植田義方が貼紙をして、白井幾代二主より贈られたと記して居るのであります。安永七年は我が眞澄翁の二十五歳の年で、翁の實名は白井英二秀雄でありました。父の名は秀眞といふと何かに書いてはありますが、此白井幾代二主は父で無ければ叔父か兄、兎に角身内の人であらうと存じます。田中道麿は御承知かと思ひますが、初期の本居翁の門人で名古屋に住し、師に先だつて歿しました。入門の當時既に一家をなした知名の學者で、自身亦多くの後進を率ゐて居たのであります。其遺著なり社中名簿なりを見たら、大抵此關係も知れることと思ひますが、眞澄翁自身の學問の系統も、ほゞ之によつて推測し得られるやうであります。眞澄翁は永遠の旅に登る以前、京を知り又近畿をあるいて居ることが、日記の中からも窺はれます。東三河の田舎に居て獲得した學問で無いことは確かですが、さりとて「歌は冷泉家、書は近衛家」

からといふ風説は、うかと信用することが出来ませぬ。國學には萬葉期以前の古意を掬まうとしつゝ、歌だけは佛教文化の影響の大きかつた時代の風に追隨したことは、實は本居翁なども持つて居られた不調和な兩立であります。是にも門派の人々の首肯するだけの理由は勿論ありました。つまり學問こそは遠く古く溯り究める必要があるが、技藝は寧ろ現在の生活と、少しでも親しみのある様式に遵ふべきだといふのでありませうが、私などは鈴屋一系の歌の風が所謂冷泉派などに近いのは、其趣味だけは本居翁の國學完成よりも前に、既に固定して復改むべからざる迄になつて居た爲で、勢ひ他派の新らしい擬古體に反感を抱かざるを得なかつたのであらうと思つて居ます。しかし私はまだ田中道麿翁の歌といふものは一向に知らず、又白井氏の家の學がどれだけ迄、菅江翁の年少時代を感化して居るかを知ることが出来ませぬが、天明寛政の交、奥羽の邊隅に於てはなほ異數であつた新派の學問と、古風な歌才との取合せは、海道の衝に當つた三河の眞澄翁の故郷では、必ずしも有り得べからざる不思議では無かつたので、獨り數奇を極めたる翁の運命が、突如としてこの新機運を、間道

から此地方にまで、運び込んだ因縁を奇とするのみであります。

### 寧ろ將來の爲に

實は私はこの百年祭の期日までに、出来るならば眞澄翁の小傳を書いて見たいと心掛けて居りましたが、今になつてそれが容易の業で無かつたことを感じます。しかし只今も申す如く、尋ねて行けばまだ少しづつ明らかになつて行く見込はあります。翁の書翰は石井忠行の伊都園茶話に集められたもの若干、其他雄勝の佐藤家から出たもの、保呂羽山の大友家に藏せられたもの、又栗盛文庫の二三通などの他に、まだ翁を世話した家々には、残つて居るものが多からうと思ひます。それを揃へて見たところが、やはり不明な點は幾らでもありませうが、少なくとも之に由つて旅行と學問との如き一見兩立し難い二つのものを、斯くまで調和させ得た人の氣質と修養とを、窺ひ知る便宜はあらうと思ひます。

それよりも更に直接に秋田の諸君に興味があらうかと思ふのは、菅江翁と交遊のあつた家



家の其後の歴史であります。中部地方ならば百年は誠に怖るべき期間であります。殊に維新の大變遷を経過して、村に昔のままの繁榮と聲望とを保持するものは、十にして其一をも期し難いのでありますが、東北は社會組織が幾分かちがひまして、悪い生活はいつ迄も情無く悪いと同時に、所謂親方衆の境遇は比較的安泰で、少なくとも何人にもわかるやうな特別の原因が無ければ、さう無意味には退轉しなかつたやうであります。港町に住む者又は士流は別として、村に住して曾て旅の歌よみを介抱し、その非凡の風流に共鳴した位の家ならば、或は今も尙以前の繁昌を取傳へて居る者が少なくないかも知れません。それを今一度この精確な記録に基づいて、尋ねて見たならば面白からうと思ひます。

考古學といふ學問はこの一世紀を通じて、ひたすらに上古の何等旁證を得難いやうな區域に潜り込み、僅かな石器土器の破片によつて、出来る限り自由なる空想を馳せようとして居りましたが、未知を知り忘れた記憶を喚起す必要は、等しく我々の父や祖父の時代にもあるので、今までは是を發掘して見なかつた爲に、突如たる傳世品出現の人を驚かすべきものは、

却つて此方面に多くなつて居るのです。遊覽記の何れの巻であつたかにも出て居ますが、曾て北秋田の或川の洪水に、岸が崩れて土中から一軒の農家がそつくり現れ、其中には木を彫つて作つた様々の器具がありました。ほんの百年か二百年前に、土が流れて埋まつたもので、之を今日の生活と比べると殆ど別世界の感があります。それが地上に於て漸を以て移つて行きますと、人は今有るものをなほ元の儘と考へるのであります。精神生活の方面でも是と同じことで、我郷土の事ならば我是を知ると信じて、しかも人は既に新らしい現代の考へ方をして居るのであります。菅江翁の歿後百年の記念會が、何とぞ此縣の爲に、亦一箇の川崩れの如き發見の機會であらんことを望みます。

## (追記)

一、植田義方翁との交情のなほ久しく續いて居たことは、又一つの偶然の資料によつて明らかになつた。さうして是は三河の方の人々の、全く知らずに居ることなのである。近頃能代市

の近藤八十二氏の發見せられたものに、彼地に傳はる木曾路名所圖會の書入れ本があつた。同書卷三、寢覺の床の條に、「吉田植田義方」の詩が一首載つて居ることも私は知らなかつたが、能代本には其欄外に、次のやうな眞澄の筆の跡が見られるさうである。

## 眞澄考

三河國吉田驛なる植田義方は、もと賀茂眞淵にまなび、俗名はうゑ田屋七三郎とて、

おのれは一たびまなびの親とせし人也。いと命長く、此秋里離嶋が作きし東海道名

所圖會にも、義方の名毎々見えたり

植田家が吉田の領主の旨によつて濱松から引移つたこと、岡部氏と何か親縁のあつたことは自分も聽いて居たが、眞淵の門人といふことは知らなかつた。それが同時に又眞澄の若い頃の師であつたとすると、學問の系統は是で一端は明かになつたので、私が「東風俗」の奥書によつて、名古屋の田中氏の關係を推測したのは、或は考へ過ぎであつたかも知れぬ。東海道名所圖會はまだ當つて見ないが、同書卷三に三河木野原、又豊川・度津・志賀須香の渡等に就ても、植田氏の考證を掲げて居ると近藤氏は言はれる。乃ち長命であつた義方翁の學

問は、既に縣居門の外に出て居るのだから、その感化も亦想像し得られるのである。眞澄が能代に來て滞留したのは、享和元年の冬以來何回もあり、殊に文化の初年には頻々と來て居たのであるが、この木曾路名所圖會が刊行せられたのは文化元年だから、之を讀んでこの書入れをしたのが、大よそいつの頃だつたかは測算し得られる。乃ち津輕で紀行の一篇を複寫して送つてから、なほ十年近く後まで、少なくとも内部の友誼は續いて居たのである。植田翁の歿年は當主の七三郎君に問へば直ぐにわかるであらうが、或はこの新刊の書に一篇の詩を寄せて居るのを見て、あゝまだ達者でござつたかと、もう一度文通をしたのではないかと想像する。何れにしても三十歳前に國を出てしまつて、もう五十も幾つかを越える頃まで、斯うして遙々と心を寄せて居たといふことは、双方の手柄も思はれて奥ゆかしい話である。

一、このついでを以て、白狀をして置かねばならぬ誤りが一つある。それは眞澄が植田氏の所へ、遙々送つて來たといふ鶴の羽のことで、自分は之を「津輕の濱の云々」とあつた様に思

つて、それなら七月十三日の晩に、いよいよ松前へ渡海するに先だち、宇鐵三厩の海岸を終日あるいて居た際に、拾つたものだらうと獨り合點をして、其日の光景を暗記のまゝに、二三の場所に於て話をしたのである。ところが此頃になつて其鶴の羽の紙包が、まだ返さずにあつたのを見出したから檢めて見ると、津輕の濱では無くて「松前鶴の思ひ羽云々」とある。そこで早速其點だけは訂正して置いたが、既に以前の讀者に感動を與へて居るのだから、話の全部まで削つてしまふことも出来ぬやうに思つて、單なる想像説として存して置くことにした。全然有り得ないことも私は考へて居ないのである。白井氏の松前上陸には色々の故障があつて、中々落着しなかつたと傳へられる。さうしてこの鶴の羽が三州吉田へ届くまでには、三月餘りの日數しか無いのである。或は松前からの最初の書信に、かねて拾つて置いたものを封じ込んだとも考へられる。又さういふことをよくする人であつたやうに思ふ。

一、眞澄翁の初期の日記の中には、父母を思ふ歌は非常に多く、又京都のやうな處で、兩親

に對面した夢を見たといふ記事などもある。さうして植田氏へのやうに、普信を通じたといふことはどこにも見えないのである。こゝに何等かの悲しい祕密が、潜んで居るのではないかと私は想像して見たのであるが、それとても多分永久に明かにならぬであらう。「伊寧の中路」といふ信州の紀行には、天明三年の秋、亡母の三回忌を營んだとある。其折の歌詠を集めて、手酬草といふ一書を作つたとも記して居る。是が繼母の難を避けたのだといふ説の元かと思ふが、それにはあの時代として、繼子の苦しみをするには幾分か年を取り過ぎて居るやうである。植田義方翁の日記又は其家に保存せられて居る書翰類に、何かこの間の消息を傳へたものが有るのでは無いかと思ふが、残念ながら今はまだ少しの手掛りも見つからない。或は「常被り」の頭巾のやうに、強ひて知らうとせぬ方がよいのかも知れぬ。

一、秋田の講演に於て、言はうと思つて果さなかつたのは、勝地臨毫といふ畫集のことであつた。内閣の文庫には多文模寫であらうと思ふものが十數冊、秋田叢書の卷十二にも、その

寫眞版が四五冊分ほど出て居るが、書名を聴くとたゞ單なる風景スケッチのやうで、實は澤山の解説を伴なうた見取圖、畫集と言はうよりも寧ろ一種の地誌である。所謂遊覽記の中にも「阿仁乃澤水」の如く、是と同様に畫圖ばかりのもがあり、又「雪の飽田寝」や「男鹿の島風」のやうに、本文といふ部分がほんの五六枚で、それに數十葉の繪を添へたものもあり、其他の紀行の卷々とても、是と共通の描き方をしたものが多いのである。眞澄翁の旅行畫の著しい特色は、畫そのものゝ効果を無視して、勝手にどの場面へでも甲乙丙丁の文字を朱で書き込み、其山川村居社寺等の名を、可なり細かく餘白に列記したことで、其爲には又解説の文章の中に、それ／＼の朱字の記號を挿入して、對照の用に供して居るのである。この奇抜で又親切な方式は、津輕から秋田に入つて來た頃を境として、段々と盛んになつて居る。多分は實習の結果寫生がいよ／＼達者に且つ面白くなつて、元は挿繪であつたものが、しまひには主從顛倒するまでになつたのかと思ふ。自分は素人で繪の批評は出來ぬが、眞澄翁はいつも繪具を單色で使つて、しかもその配合には自然のうま味がある。それで居て實地を可なり

精確に寫し出し得たのだから、自分も楽しみで追々と描き進み、しまひには文章の分量を追ひ越して、勝地臨毫のやうな畫ばかりの紀行が出來たのであらう。秋田縣には翁の畫幅も相應に傳はつて居て、中には本職にも劣らぬものがあるらしいが、それは先づ餘技といふ程度のものであらう。是から類推して勝地臨毫の價値を豫斷することは出來ない。一言でいへば後者は生活の記録である。目的は別に有り、之を味はひ又利用し得る者も別に存する。他日北方の文化が一段の躍進を告げたならば、必然に之を學問の用に供せんとする者が出て來るであらう。先づそれまでは保存が大切である。斯ういふことを私は話して見たかつた。

(昭和十六年九月)

## 信州と菅江眞澄

—「來目路の橋」活字本の端に、昭和四年七月—

著者が菅江眞澄といふ假の名を用ゐ始めたのは、この「來目路の橋」を書いてから更に二十餘年、即ち三たび出羽國に足を踏み入れて後のことかと思はれるが、現在では其生涯の紀行を一括して、之を眞澄遊覽記と總稱するのが普通になつて居る。恐らくは自分の命名ではなかつたのである。同じ境遇の人で無ければ、容易に想像も出來ぬ話だが、此旅人は前後五十年に近い漂泊生活の間、常にその若い頃からの旅日記の大部分を携へあるいて居た。例へば寛政六年に書いた「游遇濃冬隠」には、外南部の田名部に滞在中、舊い日記を二三の知人に貸して見せたとあつて、十年前の「伊那の中路」「我心」なども、其目錄の内に見えて居る。或は

散亂した舊稿を後に編綴したと言つて、自身既に序次歲月を誤つて居るものもあれば、僅かに切れ／＼の寫本を假寓の家に留めて、あたら原書を紛失したのも尠なくはない。津輕藩では領内の風土形勢を記述すること餘りに詳細なるを忌んで、彼が國境を出で去るに臨み、其紀行を抑留したといふ説もある。眞澄歿後にそれを秋田へ送つて來たともいふが、果して何人の有に歸したものか、現在はまだ發見せられて居ない。天明四年の春、この「來目路乃橋」に先だつて出來たかと思ふ「諏訪の海」などは、或は諏訪か洗馬かの舊家に残つて居るかも知れず、同七年の松島鹽釜の紀行も、必ずあの地方に埋もれて居ることゝ察せられるが、まだ我々には尋ねて見る手段が無い。最近に私の調べて見た所では、書名の知られて居る紀行の數は七十二編あつて、秋田の明德館本は最も完全に近い集録と稱せられるにも拘らず、未だ其三分の二にも達しないのである。

しかし兎に角にこの貴重なる前代東北の文獻は、殆ど著者自身の手によつてのみ、今日まで保存せられて居たと言つてよかつた。我々に取つて殊に有難い眞澄翁の習癖は、彼が根氣

よく又筆豆で、自身日記を複寫するの勞を意としなかつたのみならず、屢々其一本を關係深き者の家に遺し留めて去つたことである。それが晩年に藩の學館の國學方たちの懇懇に従つて、初期以來の紀行を自筆に編輯したのが、今ある佐竹侯家の原本四十餘冊であるといふ、其後天樹院公義和は更に經費を給付して、之に就て別に坐右の一本を精寫せしめられた。是も筆者の計畫指揮に成つたことは確かであるが、少なくとも其挿畫だけは、専門畫工によつて幾分か美化せられ、又如何なる事情があつたか、卷數が少しく前者に減じて居る。現在内閣文庫に屬する地誌局本なるものは即ち是であつて、上野の圖書館に在るものは、自分が内閣の記録を管理して居た頃に、西村竹間氏等が複寫せられた本である。其成立ちから言へば、此等を定本と認むべきは當然であるが、何れも右申す如く老後の結集である故に、往々にして字句名稱に若干の誤謬無きを保ち難いのである。

眞澄遊覽記といふ名稱は、久しく我々も踏襲しては居たけれども、實際は著者の本意とする所では無かつたらうと思ふ。第一に此紀行の大部分は遊覽記を以て呼ばるべきもので無か

つた。風景の描寫は歌文の末技と共に、寧ろ此旅客の漂遊を圓滑ならしむべき一箇の手段に過ぎなかつたことは、心ある讀者の直ちに看取し得る所である。そんなら彼としての特長は何に存するかといへば、第一には世に顯はれざる生活の觀察である。あらゆる新らしい社會事物に對する不斷の知識欲と驚くべき記憶である。遊歴文藝家の稍おどけたる假面を被らなかつたならば、或は局に當る者の忌み遮る所となつたかも知れぬほどの、小さき百姓たちへの接近である。しかも學問以外の隠れたる目的の絶對に無かつたことは、彼の一生の淋しさからでも證明せられるとすれば、この不自由な左の手で物を採るやうな擬古文を以て、あらゆる見聞を記録し得た技能に向つては、特に深甚の感謝を拂ふべき理由があると思ふ。

信州の讀者は恐らくは先づ感ずるであらう。天明の初年は京江戸の文華の、最も精彩を放つた時代であつた。名ある儒者文人の此地方に輩出した者も、其數は決して乏しとしなかつた。しかも一篇の「來目路の橋」に、僅かに一端を示したやうな農民の感覺、山の陰・野の果に家する人々の思慮や自然觀を、書いて百年後の我々に残してくれたものが、此他にも果し

て有ると言へようかどうか。時勢の致す所、それは到底望み得ないことだつたとすれば、少なくとも此書の我々に對する外史的價值は、その比類の少なかつたことによつて高く評價せられねばならぬのである。

ところが校訂者としての自分の感動は、更に又是に倍加するものがあるのである。この片雲の月の前に行くが如く、過ぎて永古に還り來らざりし一旅客は、後に北邊の雪の底に隠れて、四十餘年の孤寂生活を味却すべく、運命づけられたる天才であつた。旅で修養し旅で智識を積み重ねつゝ、百年を隔てゝ漸く其功績を認められる様な事業に、向ひ進まうとして居た學徒であつた。眞澄翁の後年の紀行で、是非とも後代に傳ふべき文化史の資料は、南部では「奥の手振」、津輕には「津輕のつと」、秋田には又「鄙の遊び」・「芒の出湯」・「氷魚の村君」等の數書があるが、この精確を極めた生活記述が、單に才藝ある者の一時の漫興に成つたもので無く、言はず氣質であり又心掛けであつたことは、既にこの一篇の「來目路の橋」の、頻頻たる旅衣や言の葉の玉の光といふやうな、凡庸なる詞章の間からも之を窺ひ見ることが得

るのである。

此翁の旅行癖、未知の山川に對する熱情と剛氣には、優に當代の登攀家をして推服讃歎せしむるに足るものがあつた。例へば津輕の暗門の瀧の如きは、今も探險隊を必要とする程の深山幽谷であるが、翁は風雪を侵して一日飄然として之を訪ねて居る。阿仁の白絲の瀧の深冬の寂寞境は、この旅客を得て始めて歌となり畫となつた。南部の恐山の經驗は、一夕は大雷雨、一夕は又脚を没するばかりの大雪であつた。蝦夷ではアイヌの小舟に乗つて、珍らしい多くの磯のコタンを寫して居る。不遇が特に旅人をして勇猛ならしめるものであるならば、斯かる天分豊かなる旅人の漂遊流轉は、寧ろ我々の學問の爲に感謝すべきものであつた。しかもその意義多き未來を未知數として、健氣にも又思ひ深く、北へ／＼と進んで行く、茲にその若者の孤獨の姿を視るのである。老いて羽州の山の町に客死せんとする眞澄翁の、壯齡三十一歳の面影は是であつた。是を見彼を懷ふときは、學藝も亦人の心を憂鬱ならしめざるを得ない。

昭和三年の九月には、秋田寺内村の墓前に於て、眞澄翁百年の記念祭が執り行はれた。洋たる雄物川の水は、流れて北海の寒き潮に入り、砂洲は雲に連なつて、遠き國々の有れども無きが如きを思はしめた。この空漠たる萬古に面して、小高くかの「菅江眞澄翁墓」は立つて居る。百年は期する所ある者の、屢々口にする數字であつたが、今に於て寧ろその小に過ぎたるを覺える。之に比べるときは、碑の主の一生は尙遙かに多事であつた。彼が秋田に老いんとするや、頓に認められたものは風景畫家としての才能であつて、乃ち勝地臨毫十餘卷の著があつた。當時比内ひないの方面に於ては、偶然に古物の發掘せられたものが多く、彼は又之を影寫して今日の考古學の先驅を試みようとして居る。しかも津輕の方の記録に於て、彼の事蹟の特に認められたものは、主として本草物産の檢出と蒐集とであつた。松前に於ては歌道の師として、松前侯の母堂文子の御方の庇護を受け、還つて南部の半島に入るに及んで、乃ち訓詁考證の學問を以て人に説かうとして居る。環境の生活を拘束したことも、恐らくはやゝ忍び難いものがあつたらうが、彼は尙其前途を開拓して、自ら成長して本眞に歸著



することを怠らなかつたのである。それが歿後既に一世紀を過ぎ去つて、依然として唯この職業歌人の斷簡零章を珍襲して、ひたすら其市價の甲乙を省みんとする者が多いのは、是はた何の心であらうか。

自分が眞澄遊覽記の何れか的一篇を世に公けにして、所謂百年の是非を明かにしたいと念じたのは、固よりこの見當違ひの骨董癖からでは無かつた。一切の我田引水を差控へてもなほ世上に提供するに足る一事は、彼の人物が征途に在つて圓熟し、彼の學問が羈旅の間に進歩したといふ奇異の實例である。眞澄は天明の初年に故郷を出てから、一年として同じ處の正月をしなかつたと同じく、其以前に於ても亦盛んに旅行をして居る。信州越後路から出羽に入つて来る前に、江戸はどうか知らぬが少なくとも駿河までは知つて居る。京も大和も會遊の地であつた。乃ち家に在つて書を読んだ期間は、極めて少なかつたらうと思ふにも拘らず、其隨筆を見ると多く流行の書を繕いて居る。さうして其大部分は彼が信州を通つてしまつてから、後に出板せられたものであつたのである。彼が文章は巧みに古文の骨法を把へ

ては居るが、一派の學匠に就いて陶冶せられた痕が無いのみならず、往々にして曲亭一流の讀み本の感化を認めるのは、恐らくは刻苦自修の人であつたことを語るものであらう。當時の交通と社會雰圍氣は、稀には斯ういふ形式を以て、或天才を長養することも出来たので、しかも内に在つて自ら具はる氣魄は、かゝる不便なる境涯の下に於てすら、なほ終には發露せずして止むまじきものであつた。故に自分は此事實に據つて、頗る現代教育制度の缺陷に對する悲觀を、緩和し得るやうな氣がするのである。

筆者の傳記に關して、只今自分の明言し得る部分は至つて少ない。眞澄本名は白井英二秀雄、三州豊橋附近の、農で無い中流の家庭に生れたことだけは判つて居る。あの土地を尋ねて見ると、今でも白井を苗字とする者の群れて住んで居る村が多い。或は花田の白井家では無かつたらうかといふ説があるが、もしさうだつたらそこはちやうど豊橋の停車場になつて、元の住民は大部分離散して居る。永久に身元を突留めることが出来ぬかも知れない。當人も亦はつきりと、之を語らうとはしなかつたやうである。家出したのは三十歳の天明三年、

もしくは其前の年であつた。さうして其事情も亦永遠の祕密であつた。旅行の動機は國々の古い御社を参拜して、還つて之を信心深い父母に語る爲と、津輕などでは日記の中に書いて居り、又到る處で故郷に歸つて行くやうに人に告げたと見えて、さういふ意味の送別の歌を貰つて居る。三河との交通も丸々絶えて居たわけでは無かつた。家を出てから二十年近くなるまで、幸便のある毎に音信はつゞけて居た。が只其消息が餘りにも幽かであつた。紀行の中には屢々父母を思ふ悲しい吟詠が見えて居る。さうして自分は北へ北へとあるいて、曾て温暖なる東海の濱へ、足を向けようとはしなかつたのである。

眞澄翁の足跡は、所謂遊覽記の排列に由つて、大體に之を繋いで行くことが出来る。最後の秋田領の二十年ばかりは、もう其紀行も書き残されては居らぬが、其間は藩廳の委嘱を受けて、新たなる風土誌を作るべく、領内の各村を巡つて居た。「月の出羽路」「雪の出羽路」は今の世にもなほ珍とすべき實地踏査の地誌であつたが、惜むべし事業が餘りに雄大で、彼の齡は又餘りに傾いて居た爲に、終に未完成のまゝで傳はらなければならぬことになつた。文

政十二年の七月、仙北郡梅澤といふ村に在つて病を獲、角館神明社の神職鈴木氏の家に來て、十九日といふに亡くなつた。兼て遺命を受けたる秋田の門人鎌田正家といふ者が、他の同志と共に柩を奉じて還り、之を寺内山の自分の墓域に葬つた。其鎌田氏の家も今は既に祀を絶つて居る。祖先一門の小さな多くの石碑が、我が眞澄翁の墓標を取圍んで、空しく残つて居るばかりである。

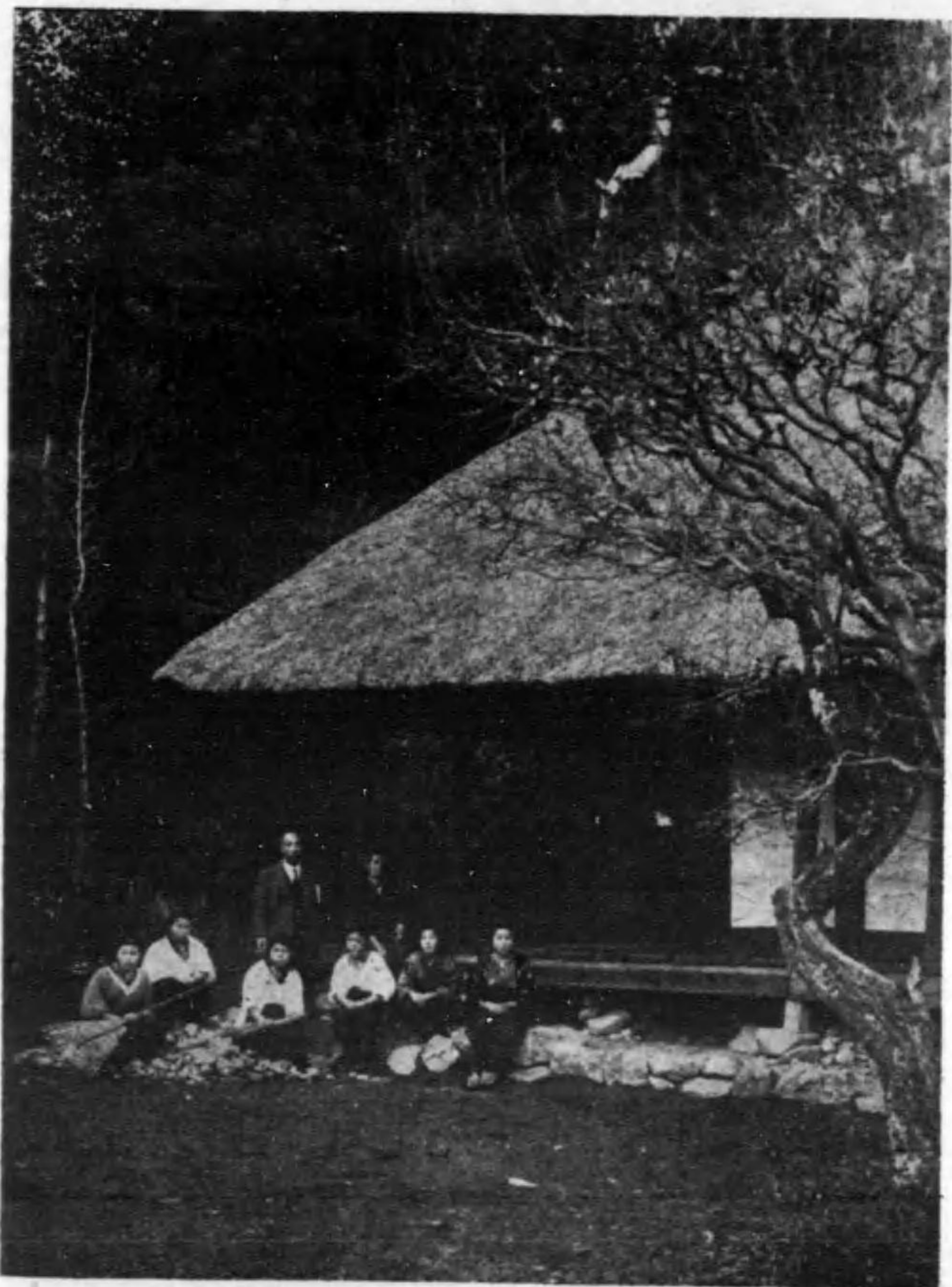
## (追記)

一、この一文を草した際までは、まだ信州に是ほど多くの、壯年白井氏の文章が残つて居らうとは思はなかつた。翁が晩年に整理した紀行の序文に、「洲羽の海」「菴の春秋」其他の數著のあつたことを説いて居り、それが皆この間のものなることが察せられるので、或は信州のどこかに今も埋没して居るので無いかといふことを、より／＼は話して居た。ところが「來目路の橋」の刊本を讀む人が多くなると共に、先づ方々から歌の短冊が出て來た。薄の宮の

神主上條義方氏の家に見出された一首などは、手跡が見ごとであり、且つ紀行の文と繪とがこの歌の前後の事情を詳かにして居るので、松本の諸君が珍重して、繪葉書にして仲間に頒つた。殊に洗馬<sup>せま</sup>では眞澄の出發を見送つて、三日の間共にあるいた三溝政員の日記までも出て來たので、其後寛政十年の大火はあつたけれども、それでもまだ何物か災厄を免れて、傳はつて居るだらうといふ想像は強く、飽きずに搜索を續けて居るうちに、終に四冊の眞澄自筆自装の寫本を發見したのが、同じ年十月下旬の事であつた。この時の大きな感動は、亡友胡桃澤勘内君が、「旅と傳説」の三巻一號に詳しく書いて居る。この發見の爲に最も多く働いたのは中村盛彌君で、見つけた場處は村の醫家熊谷氏、即ち現在三人のすぐれた博士を、出して居る家の倉庫であつた。日記の中にしばしば名が見える醫師可兒永通は、この人々の祖先であり、又長興寺の洞月和尚と共に、眞澄の有力なる庇護者でもあつた。斯うした人の家に保存せられて居たといふことは、たとへ子孫の者はもう知らずに居らうとも、單なる置き忘れでないことは疑ふ餘地が無い。四冊の寫本には甲乙の番號が打つてあつて、それを並

べて見ると、まだ少なくとも二冊は抜けて居ることがわかる。「菴の春秋」は一卷の完本であつて、日記では無いが此土地に入つて來て滿一年の後に、今謂ふ釜井菴の居住記念に、周辺の風物と人事とを四季の順序に叙述したものであつた。「洲羽の海」かと思ふ一編は天明四年正月の十五日、諏訪下社の祭禮を見に、鹽尻峠を越えて往復した記事に、それから後の少しの日記を添へたもので、分量があまり僅かだから、或は別に完本が出來て居て、是は其粗稿のやうなものだつたかも知れぬ。「筆のまゝ」と題した一卷は卷頭にこの斷章を載せた他に、我々が問題にして居る安永十(天明元)年の淨瑠璃姫六百回忌追善詩歌連誹序といふ文と、枝下<sup>しげ</sup>といふ地名の見える少しの日記の、後先も切れたものとを、他の若干の歌文と共に綴り合せて居る。つまりはたゞ單なる雜録に過ぎぬのである。信州では昭和五年九月、「菴の春秋」の一卷を刊行し、その際は等の文章は皆附載した。秋田叢書の方でも其中から、二つの日記の斷片を採つて眞澄集に入れた。だから是だけはもう再び埋没する心配は無いのだが、その以外にもう一つ、爰に誌して置かぬと忘れてしまはれさうなのは、著者が斯うして我日記の

寫しを、友人の家に贈つて置きながら、なほ行く先々でそれを改訂して居たことである。信州の刊行會で覆刻した眞澄の日記は四卷で、そのうち新たに洗馬で發見せられた「菴の春秋」を除けば、他は悉く内閣文庫本、即ち天樹院公の手元にあつた最終の淨寫本に依つたのであるが、是と熊谷氏の家から出現した四十餘年前の本とを比べて見ると、ちよつと意外なほどの差異がある。尤も事實の内容は同じなのだが、歌と表現の文句とが著しく變つて居る。先づ一方は「伊寧の中路」といふ可なり厚い一冊となつて居るに對して、洗馬に在つたものは「伊奈濃中路」と「科野路旅寢濃記」との二卷に分れ、しかも此方は八月下旬、更科姨捨の月を見に行つた紀行「わがこゝろ」に移る前を以て終り、それから後はたゞ十月以後の記事が數箇條、例の「筆のまゝ」と題した雜録中に、きれ／＼に保存せられて居るばかりである。然るに天樹院本の「伊寧乃中路」には、それも含まれて居るが其以外に、なほ八月二十三日以後の日記が、ごく／＼飛び／＼ながら排列せられて居り、それから又洗馬本には全く缺けた彩畫も加はつて、一巻の體裁を備へて居るのである。恐らく最初見取圖や日々の吟詠が、別々の紙で保存



せられて居たのだらうと思ふが、前にも言つた如く十年後の外南部時代には、もう一卷の成書として人に示して居り、又斯うして信州を去る以前に、形はちがつても木にして残してあるのである。著書は必ず一つの形に固定して、自分でもちよつとは改めにくいものにして世に問ふ現代人の心理とは、可なりちがつたものを昔の學者は持つて居た。古河古松軒の東遊雜記を校訂した時にも、私は同じ經驗を得たのだが、今日世に傳はる此書の異本は、殆ど一種毎に文段の繁粗がある。手元に留めた本は見るたびに手を入れ、しかもそれを色々の段階に於て、人に見せ又寫させて居るのである。眞澄翁の文も歌も、死後に枕に近かつたものが最も正しいのではあらうが、洗馬に四十何年も前に留めて去つたものは、却つて當時の實際の記録であつた。薄の宮の上條家の短冊のやうに、最後まで全く改めなかつたものもあるが、他の多くの吟詠はいつ訂正したか、半分以上もよみかへてあるものが少なくはない。それを比べて出すと或方面の人には興味があらうが、自分はそんな事までする氣は無い。たゞ眞澄はさういふ湛念な人だつたといふことゝ、今一つは記事の内容には些しの變更を見ないとい

ふことを、當然の話のやうだが保障して置きたいと思ふ。

一「菴の春秋」の発見を述べた序に、所謂釜井菴のことを一通り書いて置きたい。釜井とは城山麓の構への地であることは、土地の人たちも知つて居たのだが、呼び名になづんでもう百年餘りも前から、斯んなをかしたな文字を用ゐて居る。現在は村の管理に歸し、時々集會用に使はれて居るが、以前は手習師匠が住み又は道心者を置いたこともあり、その又一つ前には高野山の徳善院の控へ地で使僧が来て泊り、元祿三年の檢地までは除地であつた。構造から見ても佛教用だつたことはよくわかるが、それは廢墟を利用したもので、背後に聳えた山が我々の謂ふ白米城傳説、即ち白米を以て馬の脚を洗つて、水攻めは無用と寄手の眼を欺いたといふ言ひ傳への地、洗馬といふ村の名の起原もこれだといふのだから、恐らくは曾て領主の邸宅のあつた地なるが故に構と稱し、それに建てられた菴だから構菴なのであらう。菅江眞澄を記念すべき遺跡は、捜せばまだそちこちに多いことと思ふが、その何れよりも是

は古く、且つ因縁が濃やかである。「菴の春秋」を精しく讀んで見るまでは、壯齡三十歳の白井英二が、たとへ暫らくでも此菴の主であつたことを、まだ我々は想像することが出来なかつた。「伊寧乃中路」の七月七日の條には、土地の習はしに遵つて此菴の軒先に、彩紙を剪つて作つた男女の雛形を、掛け連ねた光景が寫生せられて居る。是なども此人が自ら手を下して作り設けたものとは思はれず、別にさういふことをする人が住んで居る處へ、訪ねて行つて見且つ心を動かしたものだらうと想像して居た。實際又此頃は始終他の村へ遊びに出て、折洗馬へは戻つて來るだけだつたから、いよ／＼この菴の人となりきつたのは、雪が降り積り冬籠りをする時になつて、里ではそろ／＼と歳の營みに、かゝづらはるやうになつてからかとも思ふ。「菴の春秋」を讀んで見ても、晝はさま／＼の小鳥の姿を見、夜は獸の鳴き近づく聲を聽くといふやうな、獨りで居なければ出逢はれぬ山の情景が此頃から現はれ、やがて春色の溢ち溢るゝに至つて、再び外に出て童兒老女の、ほゝゑましい人事に立ちまじつて居るのである。諏訪へ往復等の僅かな日記の外、天明四年の前半は記録が無く、すぐに「來目

路の橋」の出發になる。ちやうどその中間の六ヶ月足らずが、或はこの釜井菴での靜思の時期では無かつたらうか。乃ち菴と此旅人との因縁は、記録に存する以上に深かつたのではなからうか。といふやうな事が考へられるのである。ところが昭和十五年の秋になつて、又一つの發見ではないかと思ふやうな事實があつた。この釜井菴の佛壇の背後から取出して、何と無く藏つて置いた五六本の古い軸物の中に、煤けきつた一枚の畫像があつた。それを念入りに洗はせて見ると、總髮袴羽織の男の姿で、後の刀掛には長刀を横たへ、右脇には書卷を積み重ね、腕を組んで坐つて居る。畫の上には十箇ほどの贊の文字があるが、何としても其意味が讀み取れない。落款には友人澤邊允明夫摸とあるのが明かに讀まれる。摸といふのは少し氣になるが寫生の意味とも取れる。この澤邊氏は眞澄の舊知であつて、十餘年以前の第一回の旅行の際、交を結んだ三人の松本人のうち、二人は既に没してこの翁のみ健在であつたことが紀行に見え、是と往復した擬古體の消息文が、「筆のまゝ」の中にも残つて居る。此老友の筆に成る肖像畫の、年は三つ五つふけて見えるが、やはり丸顔の柔和さうな人物を寫

したものが、この釜井菴の中から出て來たといふことは、年頃この人の事ばかりを心に掛けて居る我々に、さてはといふ感じを抱かせずには置かない。しかし速断はまだ中々出來ぬのである。第一に蝶題すと署名した畫の上の數文字が、まだ何としても解し得られぬのである。是は自分などの推測では、もと二枚折の屏風か何かで、片方に可兒老人か洞月和尙かの像があり、贊は兩方にかけて續いて居たので、全部で無い爲に讀めないのかとも思ふが、まだ今日まで其半分が現はれて來ない。次には當時の白井秀雄が、惜しみ慕はれつゝ此地を去つたことは先づ確かであるが、それが何ぞの折に繪像を留めるといふ、程度のものであつたかどうかは心もとない。更に今一つは此里この菴と、もつと因縁の濃かつた人が別にあつて、やはり澤邊雲夢と世を同じうして居た。其人の名は丹羽花逕、實名は茂廣、やはり長興寺の洞月上人に縁故があつて、洗馬に入つて來て讀書習字の師として世を終つた。其碑石も亦この附近の叢の中から、近頃になつて發見せられて居るが、秋元侯の浪人で祖父は松本の水野氏に仕へて居た人だとある。生れたのは寶曆辛未、即ち眞澄よりは三つの年上であり、文政三

年に七十歳で歿して居る。釜井に寓すること大よそ四十年と、碑文には誌してあつて、それがもし事實ならば、「菴の春秋」の天明四年には、もう此邊に居たわけであるが、菅江翁の日記類には一度も名が見えぬやうである。花逕先生の薫陶によつて、洗馬に文雅の士が輩出したといふのは疑はれないが、それだけではまだこの人の壯年の畫姿がこの菴に傳はつて居た理由にはならぬやうな氣がする。大泉勝淳といふ人の書いた碑文をよく讀むと、文武を兼ね備へて人柄が溫柔謹素であつたといふ點は、風采の上にもよく顯れて居るが、それは同時に又菅江氏の特徴でもあつた。この上は澤邊雲夢の傳記を調べて居る人に、果して丹羽花逕とも親交があつたかどうかを究めてもらふこと、殊に其歿年と丹羽氏が釜井菴に住み始めた年とを、明かにする必要があるので、それが容易に期せられぬことだとすれば、是もやはり菅江眞澄の多くの逸事と同じく、半ば雲霧の間に眺望するの他は無いのかも知れぬ。

(昭和十六年十月)





## 遊歴文人のこと

—「わがこころ」活字本の奥に、昭和四年十一月—

白井秀雄翁の歿後百年を記念すべく、諸君が企てられた刊行事業が縁となつて、久しく埋没して居た「菴の春秋」、「諏訪の海」其他の遺編が世に現はれたといふことは、殆ど偶然とは思はれぬ程の意味の深い實驗であつた。御互ひは之に由つて、人生が少なくとも一つの顯著なる痕跡であることを知つた。さうして時過ぎてから後でも、求める者にはなほ見出されるといふことを、教へられたやうな氣がする。

信州の多くの古人が、單にさゝやかなるその各自の生活のみならず、更に其性情と文藻との一端をさへ携へて、新たに現代の中へ遊びに来てくれたことは、血を引き縁に繋がる者の

大いなる喜悅であらうと思ふ。「昔」は斯くの如くにして我々の、垣根も無い鄰に住んで居るのである。白井一家の稍普通で無かつた歴史なども、或はこの何でも無いやうな方面から、今後追々と判明して来るのではあるまいか。例へば本洗馬から出た「筆のまゝ」といふ一冊の中に、淨瑠璃姫六百回忌追善詩歌連誦序と題した、三枚ばかりの文章が綴り込んである。走筆ながらも同一編者の手寫かと思はれるが、末には安永十年即ち二年前の日附と共に、源秀超といふ名を著して居るのである。參州牟呂吉田村植田家の藏書で見た、「東風俗」といふ一冊の末の紙に、白井幾代、二實名を秀規とあるのと共に、是は疑ひなく秀雄と同族の人であつて、當時私が白井英二の父又は兄であらうと言つた當て推量は、次第に成り立つて行くのではないかと思ふ。但しこの秀超と前に私が秀規と報じた人とは別人か否か、是はまだ何とも言へない。白井氏自身も亦父の名は秀眞と謂つたと、秋田津輕の人たちは傳へて居り、又本姓は菅原とも誌したことがあつたやうに思ふから、姓と名乗とだけではなほ心もと無い。故に先づ豊橋四周の白井一族の菩提寺に就いて、俗名を白井幾代二と謂つた人の、消息を尋

ねて見るべきである。

兎に角に此旅人の生ひ立ちが、尋常一様の農家で無かつたといふ迄は、想像して置いて差支へが無いやうである。「來目路の橋」の國仙和尚の條下には、彼の伯叔父の一人に法師のあつたことが見えて居る。十歳の昔、所謂まだ總角の頃に、既に一たび此地方に旅行して、各處の名流と文雅の交を結んで居たといふことは、確かに第二の遊歴に、足を先づ天龍川の上流に向けさせた、動機にもなつたことと思ふが、如何に才藝に秀で人に敬愛せられる素質を持つて居ようとも、是がもし一個青年の普通の旅であつたならば、それだけの便宜は出逢ひがしらには得られなかつた筈である。書いては無いけれども相應な同伴者、又は何通かの有力な紹介狀が、手引きをして居たことは先づ疑ひが無い。それ故に更科山中の嶺の觀音堂の坊に、二夜寝たことがあるといふ「我心」の記事なども、我々に取つては意味多く考へられる。小野の祭林寺や大池の宗福寺の宗派はどうあるか知らぬが、斯うして行く先々の寺に舊知の上人を訪ねて居るといふことが、特に此旅客の以前の境涯を、少しづつ暗示して居るやうに

も見えぬことは無いのである。

本人は却つて自ら心付かずして終つたらしいが、是が或は我邦の最も特殊なる民俗、自分の假に名づけて喝食文藝と謂はんとするものゝ、幽かな名残では無かつたらうか。中世數百年間の驗者法師たちが、此上も無く夙慧の童兒を尊重した風習は、決して通俗に想像せられて居るやうな、卑しむべき只一つの理由からでは無かつた。義經記の平泉寺の段、又は山門寺門の昔物語にも見えて居る如く、曾て其姿を一山の花と仰ぎ、清き泉として愛護して居たのは、本來は宗教團體の繁榮の爲に、それが缺くべからざる中心の力であつた故と考へられる。西行宗祇などの旅の文人が、或少年と歌問答をして、高慢の鼻を折られたといふ類の傳説は、何れも靈山崇祠の邊にのみ遺つて居る。所謂神童の文學が他の多くの藝能と同じく、徐々に以前の信仰と袂を分ち、常の日に常の人の取囀すものとなつて後まで、なほ一分の神祕を以て地方の鑑賞家を動かして居たことは、由つて來る所斯くの如くそれ違ひのであつた。江戸時代の記録を見ても、如何に世間がいつ迄も此不思議に、驚いて居たかを知ることが出

來る。たとへば松平冠山侯の息女露姫八歳、死後に其手箱を開いて見ると、歌と蝶の畫と兩親侍女への遺書とがあつたといふ話、是などは當時一卷の書に刻せられ、心ある人々の感涙の種であつた。斯ういふ異常の早熟兒は、其半分以上は青春に夭折して居るが、中には永く生きて後年の大家となつた例も絶無で無い。白井秀雄の時より少し後れて、遠州には石川爲藏依平といふ人があつた。五歳で人の背に負はれて居て歌を詠んだことが、たしか太田蜀山の紀行などにも見えて居る。今の佐々木信綱氏も正しく其一例であつた。彼が六歳で詠んだといふ小川町の雪の歌は、其父弘綱翁の明治開化和歌集の中に録せられて居る。

我が民族の中には、稀に此種の神童を産する血筋又は條件といふものがあつて、古くはそれが純なる自然宗教の隆興に役だち、それに次いでは一國文藝の特殊なる傾向を、促すの因みとはなつたかと思はれる。兎に角に至つて近い頃まで、僅か形を變へてこの喝食文藝はなほ行はれて居た。幼なくして詩歌書畫を能くすといふ者があれば、其評判は忽ち弘く傳はつて、わざ／＼其一筆を求めに訪ひ來る人が多かつたのみならず、後には大抵は親や師匠に連

れられて、便宜の地を巡遊する風があつたのである。さうすると地方の人々は、文藝そのもの内容實質よりも、先づこの小さな兒が歌を詠み字を書くといふ點に感歎し、殊に應酬唱和の敏捷に對しては、一種畏敬の念をさへ抱かんとしたのであつた。それが同行の長者の爲に、何等の名聞や活計で無く、言はゞ内より促されて出で、人に示すべき義務の如きものを、感じて居た場合も多かつたと思ふが、兎に角に斯ういふ尋常で無い才分を持つて生れた者は、幸ひにして長生をすれば旅をしなければならなかつた。少なくとも故郷の村に止住して、農を學んで一代を終ることは、其運命の許さざる所であつた。其上に日本では、海の外との交通が制限せられて居た代りに、あらゆる智慮藝能は、土地耕作のたゞ一つのものを除いて、悉く國中を漂泊して居たのである。さうして異郷の住民に新らしい生活技術を持ち運んだ御禮として、彼等の農作に由つて扶養せられて居たのである。

信越奥羽の寒い國々が、特に天涯の孤客に向つて温かい隠れ家であつたことは、其過去文化の記念塔が、多くは菅江眞澄といふ類の出自未詳の士によつて建設せられ居ることゝ深い

關係がある。其中でも文學は遭遇であり、又一種の啓示でさへもあつた。乃ち土著の人たちが山阪を越えて、自ら遠方に探り求むるに最も適しないものであつた。現代自治の氣風のかほどまで發育した農村でも、なほ詩歌小説などは興へられたるものを賞味し、時としては未だ來現せざる名篇に對して、豫め讚歎を用意する者すらある。以前の單調なる田園生活では、それが今一段と方式的で、又宗教性を帯びて居たといふだけである。曾て少年の日に於てこの遊歴文學の不思議な効果を實驗し、しかも一方に他の平凡なる職業の爲に、準備する時間を持たなかつた者が、もしもこの問題の白井氏であつたとすれば、たとへ成長の後特に一身上のやみがたき事情が起らずとも、彼は尙その生涯を雲水に托さなければならぬ人であつた。是を遺傳といひ環境といふべきか、はた運命と名づくべきかは私の知る所で無い。兎に角に人生の數奇には我も人も、まだ心づかさざる深い原因が幾つでもあつたのである。「伊那の中路」の卷頭にも書いて居るが、諸國の古き神社を巡拜することが、旅行の主たる目的であるといふことは、行く先々でも屢々人に告げて居る。早く還つて親たちに語り聽かせたいと、

津輕の紀行の中には述べてある。彼の父は東三河の或御社の神職であつたといふことも、物の序には之を記して居る。それが何れの地の神社であつたかは、どうも明かには示されて居らぬやうだが、彼の文章と性癖とからでも、それだけの事實はほど推察することが出来るかと思ふ。

## 正月及び鳥

——「奥の手風俗」活字本の端に、昭和五年二月——

天明八年の七月十三日、盆の魂迎への夜の夜半の頃に、津輕北端の宇鏡うてがたの濱から便船して、蝦夷の島に渡つて行つた白井秀雄は、五年目の寛政四年十月七日の夕方に返つて來た。さうして今度は下北郡突角の、奥戸おくどといふ浦に上陸した。北地の冬は既に深くして、一人の舊知の彼を待つ者も無かつたが、大畑の寶國寺の深阿上人を最初に、次々に多くの風雅の家が、喜んで彼に其爐邊の座を供し、こゝに測らずも二年半の月日を、此半島裡に送ることになつたのである。

それがこの旅客の三十九の年から、四十二歳の春までの事であつた。其間に遺されたる日

記は六種、何れも既に南部叢書の第六冊に採録せられて居る。我々は白井氏の歿後百年を記念せんが爲に、特に其中の一卷を選んで、ほぼ原形を保存しようとするのであるが、實は頗る其取捨に迷ふものがあつた。季節境涯の變化によつて、六種それ／＼の情味の掬すべきものがあると共に、唱和應酬の文字遊戲に至つては、各篇皆多少の飽満を感じざるを得ないが、日録としては固より之を省くことを得ない。仍て比較的客觀の記事が多く、殊に凡人大衆の生活に觸れたる「奥の手振」を、指定することにしたのである。南部の八摺は一昨年えいざつの四月、日本青年會館の郷土舞踊大會に、中道等君の郷里の一團が出演して、多大の感興を都市の人たちに興へたのであるが、我々は偶然にもその同じ踊の百數十年前の繪と記事とが、此卷の中に在つたことを思ひ出して、愈々之を複製して見る氣になつた。文章の世に顯はれ又は埋もれて行くのも機縁である。必ずしもその全部の責任を我々が擔ふにも及ぶまいと思ふ。

しかも此一卷の推薦せらるべき理由は、獨り是ばかりでは無いのである。「奥の手振」は普通の旅の日記の持ち得ない餘裕を持つて居る。白井氏は北郡に上陸した次の年の霜月末、田

名部大畑の友人等が強ひて留めるのも聽かず、一旦此地を發足して、毎日の雪嵐の中を東海の荒濱づたひに、八戸の方へ向つたのであつた。其折の難澁は「尾駁乃牧」といふ紀行に、詳しく書き載せてあるが、夏でもめつたに行く人の無い尾駁沼の北の岸、ちやうど其名の牧の故跡と稱する村まで来て、もう何としても前へは進むことが出來ず、よんどころ無く元の田名部の町へ戻つて來た。それが師走の十四日の夜のことであつた。見送られて立つた者の二度目の寄寓が、手持無沙汰なものであつたことは想像し得られる。ましてや町は既に年の暮である。そこで舊友と相談をして、菊池道幸といふ商人の家の、表の一間を間借りして住むことになつた。或は自炊の生活であつたらうかと思ふのは、年越の宵の供物を自分も露ばかり調べたといひ、又は夜深く戸を叩いた人を、氣づかずに返したといふことなどが、此卷の中にも見えて居る。春の初めのさまざまの作法行事の如きは、既に一回は前年の正月に目に觸れ心に留まつたものを、もう一度見直すのであつた。それを閑人の新たなる境涯に於て、改めて書いて置かうとしたのがこの「奥の手振」である。單なる旅客の見聞録以上に、遙かに

精確で又用意あるものであつたことは、大よそ疑ひが無いのである。

其上に此書にも折々見えて居るやうに、白井氏は松前に渡つて行く以前、出羽に一年足らずと奥州に三年餘り、何人よりも熱心に土地の風習を觀察して居た。さうして折がある毎に其記憶を人に語り、又綿密に比較をして見ようとするのが、此遊歴者の誠に結構なる癖であつた。多くの地方の物識りは、書を読んでほゞ都府の標準文化を解し、是と我郷土の生活と、若干の差異あることを知つて居る。又屢々諄々として之を説くことを厭はない。しかも二つ以上の土地の間を、繋ぐべき何物かを省みなかつた故に、永く都鄙雅俗の獨斷に盲従して、却つて身に附いて居る疑惑を、晴らすことが出来なかつたのである。獨り人間生活誌の一面のみと言はず、總ての受賣で無い學問の起りは、どこの國でも皆この切れ／＼の知識の、交換であり蓄積であり又比較であつた。土地を愛する人々が、自分で此必要に心づく迄は、至つてたわいも無い旅人の世間話などが、言はゞ唯一つの正しい好奇心の刺戟であつた。だからマンドギルや和莊兵衛のやうな、嘘をつく積りの探險記でさへも、尙異種諸民族の比較研

究が、進んで今日に至つた因縁にはなつて居る。ましてや我が白井氏の如きは、現實に見たこと聞いた事以外のものを筆に遺すことの出来ぬ人であつた。たとへ心あつて世人を斯道に誘導したのでは無い故に、我々の學問の開祖といふことは出来ない迄も、少なくともその無意識の功績に對しては、特にこの人によつて觀察せられた邑里の住民は素より、國內同胞の自ら知らんと欲する者も、共に與に深き感謝の情を寄せなければならぬと思ふ。

たとへばこの「奥の手振」が、新たに世に公けにせられることによつて、二つの新たな興味は、先づ我々の間に芽を出さずには居ないであらう。今から百三十七年前の、下北半島の習俗は如是であつた。是と現在の田名部大畑大湊の正月生活と、何が變遷し又何が依然として一致して居るか、さうしてその異なり又同じき理由や如何。之を考へず此書を読み終る南部人は、恐らくは甚だ尠ないであらう。それと同様に他の一方に於て、九州四國の山の村、もしくは岬の片端に古く住む部落にして、各々我土地のみの奇習異風と認め、原因を祖先の無智蒙昧に托せんとして居た者が、辛うじて此書に由つて膝を拊ち、微笑を禁じ得ぬやうな

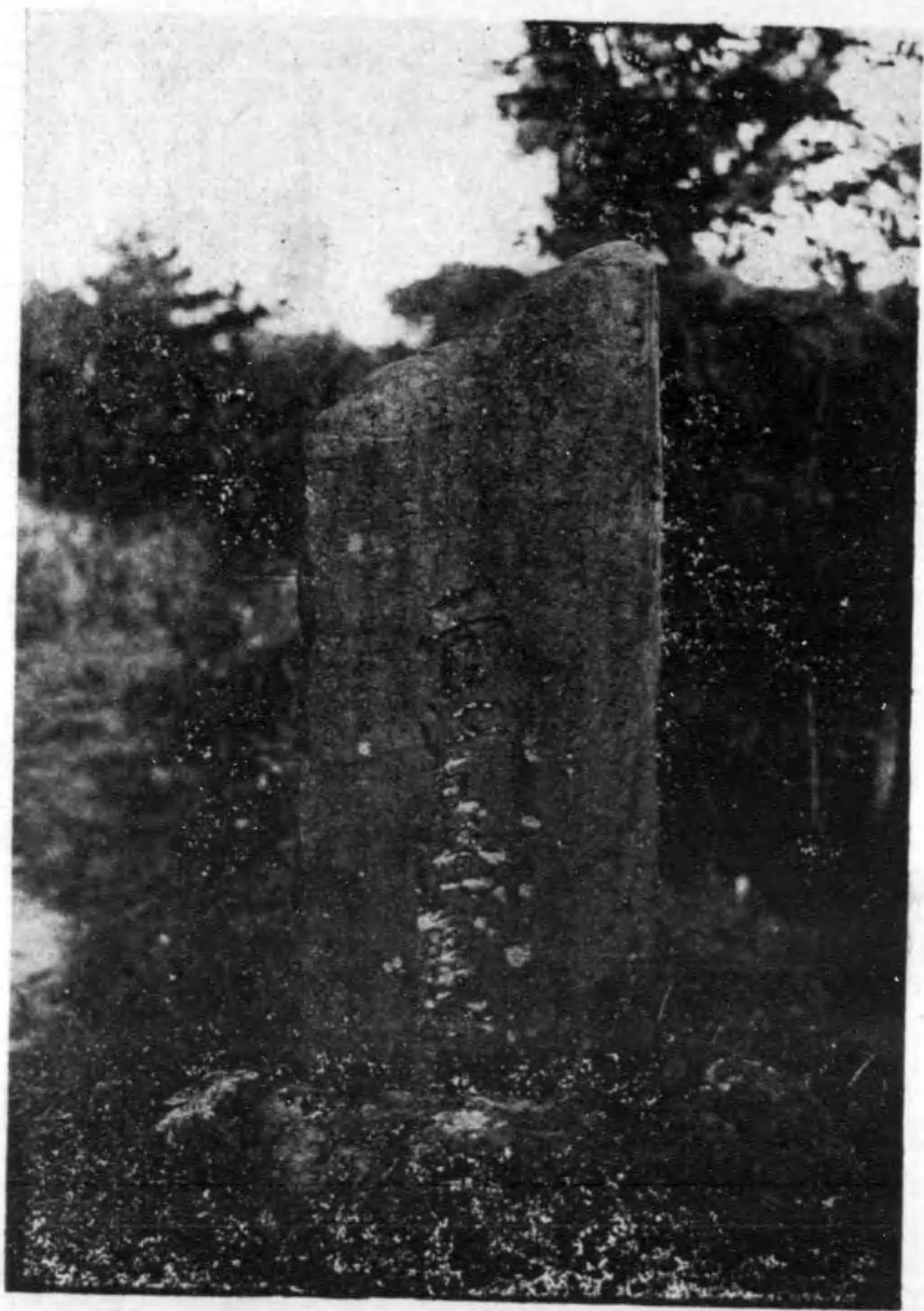
「偶合」を、發見しようとして居るのである。我々が眞澄遊覽記を刊行せんとする本意は、本當は茲に在つたのである。それには除夜の夕の幸取樺さいとりかば、小正月の「やら臭くさ」、「かせぎどり」春田打の行事などが、見た儘の挿畫になつて残つて居ることを、殊に珍重せざるを得ないのである。南北二千哩に亘る長い群島の慣習が、隠れて一致して居たのは是ばかりでは決して無いが、中に就ても前に列記する四種の如きは、少しづつ名をかへ形を異にして、今以て各地新春の缺くべからざる式法となつて居る。然るにも拘らず、人は往々にして之を各自の郷里に限るものゝ如く、誇り或は恥ぢんとして居たのは、全く松の内は家に引籠つて、出で、他郷を見る折が少ないからであつた。是だけ弘く行はれ且つ互ひに知らなかつた習俗ならば、根原は恐らく甚だ遠く、又説明せられねばならぬ大切な意味があつたのである。人に其疑問と想像とを抱かせるだけでも、我々の働いた甲斐はあると思つて居る。

終りに今一つ、校訂者一箇の興味に過ぎぬものを附け加へて置きたい。「奥の手振」を讀む人は、私で無くとも必ず心づくであらうが、此日記の如く鳥類の記事の、豊富なる日記は珍ら

しいやうである。鐵砲が横行する現代關東の郊野などゝ比べて、人口のまだ少ない寛政年間の奥南部に、遙かに鳥が多かつたのは恠むに足らぬが、それ以上にもなほ幾つかの理由はあつたかと思はれる。第一は此海峡に突出した二つの半島は、空を旅する者の東西南北の大道であつた。尻矢の燈臺に嵐の吹く夜などは、迷うてあの光明に引寄せられて落ちて死ぬ鳥が、數も種類も非常なものだといふことを聞いて居る。渡り鳥の故郷は北の方に多い。嶺を目標に來たり歸つたりしようとするれば、大抵は自然に白井秀雄の頭の上を、啼いて通ることになつたのかも知れぬ。しかも旅人には其聲に耳を傾ける様な、餘裕のあつたことも亦事實である。餘裕といふ語は當らぬかとも思ふが、兎に角にどれだけ友人が多く、又款待せられて居た旅人でも、日の暮早朝の徒然といふものはあつた。それが又鳥の最もよく啼いて通る時刻でもあつたのである。益とか正月とかの土地の人の忙がしい頃は、寄寓者の特に無聊を感じる季節である。下北半島では其季節が、他の地方よりも更に鳥の聲の多い時であつたのではあるまいか。もしさうならば假令天性では無くとも、旅人は鳥を愛するやうにならずには居



られなかつたわけである。遠く松前の果から鶴の羽をたつた一枚、故郷の舊友の家に送つて来たといふ逸話なども、始めて北の鳥に渡り着いた際の、彼の境遇を思ひ合せると中々哀れは深い。白井氏は秋田の間屋からの紹介状を一通、大切に携へて居たのだが、僅か三年の延期の間に政情が變つて、絶対に他國者の上陸を許さぬ様になつて居たことを知らなかつた。それで船中に憂愁の日を送つて居るうちに、ふと詠じた一首の歌が、圖らずも藩侯の耳にとまつて、特別の取計ひを以て許されたといふのは、實は仲に立つて斡旋した人があつたのである。しかし最初の數週間はまだ是といふ友も無く、又有力者に扶助せられ、領内を見あるほどの便宜も得られないで、獨り濱邊へ出てこの様な微々たる物を、捨ひ上げて心を慰めるの他は無かつたらしいのである。その鶴の羽が三州へ到来したのが、僅か三月の後であつたことを思ひ合せて、それを幸便に托した日の孤客の心情は想像し得られる。「奥の手ぶり」の中の鳥の記事なども、之によつてその日その時刻の、彼の寂しさがやゝ描き出されて居る。たとへば正月二十五日の寒い夜中に、こゝは川端だから殊に冷えるなど、話して居るうち



に、鼻が啼いた。それで歌を詠んだとあるが、其翌日から風を引いて寝て居る。二月の三日には恐山に登つて、案内者を頼んで少しばかりあるいて見ると、折ふし深い雪の上に日が當つて、シジフガラやテラツツキが飛んで居たのが、珍らしいので又歌をよんだ。同じく十一日には多くの雁が啼きつれて、北の空へ飛んで行くのを見て、頻りに故郷のことを考へた。といふ様な簡単な記事が、幾つとも無くこの日記の中には出て居て、それが皆誰も相手をする人の無い、徒然に堪へないやうな日ばかりであつた。白井氏の歌は大部分は作り歌で、景に對して情を吐くといふやうな眞率の吟詠に乏しいが、此一卷の「鼻の手振」の中には、ゆくり無く自分等の心を動かしたものがあつた。二月十五日の夜の明方近く、京都かと思ふ處の或家に行つて、久しぶりに兩親に對面した夢を見た。さうして目が覺めるともう朝であつて、軒には雀が啼き又鳥も鳴いて居たと言つて居る。斯ういふ心境には式も格調も無かつたのであらうか。はた又どういふわけかは知らず、その一首の歌だけは、悠々として我々の胸に沁み入るものがある。

なれもさぞ慕ふや雀むら鴉こはちよと啼きこははよと啼く

(追記)

一 文中鶴の羽の一條は重複し、又記憶ちがひだったので、今度書き改めた。この松前上陸の日の出来事は、梁川藩時代の松前家々臣の手録中に見えて居たのを、函館圖書館長岡田健藏氏が、見出して教へてくれた。眞澄翁が落ち着いて北の島の視察を始められるまでに色々の苦勞があつたことは、其後の日記の中からも窺ふことが出来る。

菅江眞澄の旅

一 現存の日記の始まるよりも前に、もうこの人は幾つかの大きな旅行をして居たことが、「筆のまに／＼」といふ隨筆の中に見えて居る。たとへば同書卷一に、「おのれ未だ童なる頃：富士見に行きしとき、歸さに甲斐が峯見んとて其國に至り、小河原の加賀美信濃守源光章翁を訪ひて、この勾玉のことを問ひしかば云々」とあり、又卷三、差出の磯の條には、馬場海蔵といふ人の家に在つて、甲斐の黒駒とよんだ牧の古跡のことなどを尋ねたとある。

一 次に同書卷四、「時知らぬ山」の條に、「おのれまた童なるとき、人に誘はれて富士詣でしてそのかへさ、三穗浦に至りて、三ツ葉の松なんと家苞に採り、有度濱を見つゝ久能神社に

ぬかつぎ、清水浦に来て白子氏の家に泊れば、何くれとねもころに聞えて二三日は爰に在るに云々」とあつて、大淀三千風の書を見たこと、又この白子氏の事は行脚文集卷七にも出て居ることを記して居る。

一 第一回の信州旅行も、總角の頃とはあるが、なほ此時よりは數年の後かと思はれる。甲州では夢山の麓を行き、又都留の郡の山路で柴櫻と土地でいふ彼岸櫻の花を見たことが、「しのゝはぐさ」といふ隨筆にも書いてあり、又「小鹿の鈴風」といふ秋田の紀行にも、こゝに二子山といふ山があつて、「箱根路行くに異ならず」とあるのだが、不思議に江戸を見たといふことが何處にも見えないやうである。たゞ寛政六年の南部の日記の中に、相模國かと思ふ處に居る夢を見たとあるから、箱根から此方も知つて居たことだけはわかる。

一 遠州は隣國だけに、何回か旅をしたかと思はれる。同じ筆のまに「卷一に、是も童の時、秋葉詣での序に、中合村の飛神社に參つて神職渡邊氏に逢ひ、飛神と呼ぶるゝ神寶の勾玉を見せてもらつたといふ外に、又式内額田郡稻前神の考證をして、遠江の眞龍、駿河の土磨などに相談したら、二人とも賛成だつたといふことも見えて居る。土磨は多分栗田土滿のことで眞澄よりは十七の兄、内山眞龍は十四歳の年上である。この二人の學者とは往來があつたと

思はれるから、或はその家集などに白井秀雄の名が見えるかも知れぬ。

一 又同じ書の卷九には、「おのれいと若かりしとき、その年五月五日、藥嶽すとて近江の膽吹山に、人に誘はれ登りしかば云々」とある。

一 尾張に居たことも同卷六、「おのれ童の昔尾張國に至りて、名古屋の橋町といふ所の古物店に云々」、又卷四には、「おのれあげまきの昔、尾張國に在りしとき、熱田神社の神録とて見しことあり云々」ともある。

一 京都は或夜の夢に、父母に京都かと思ふ處で對面すると見たとある外、私の氣づいた限り出て來ないが、歌は冷泉家の門人と世に傳へて居るから、多分は行つたことが有るのであらう。大阪兵庫以西には全然足跡が無く、たゞ吉野の寺々の櫻には、八重の薄紅もあるといふことを、「しのゝはぐさ」といふ書には説いて居る。

一 日記の名の下に「秋」とあるのは秋田叢書別卷菅江眞澄集、「眞」とあるのは眞燈遊覽記刊行會本に出て居るといふことである。以下皆之に準ずる。

天明三(一七八三) 三〇歳

委寧能中路(秋四、眞)

- 三・五 信濃飯田に入る 舊友中根某と逢ふ
- 六 同處龍阪の花を見る
- 九 天龍川に遊ぶ
- 二 松川を渡りて雨中の花を見る
- 四・一 原町(下伊那郡市田村)池上氏に寓す
- 五 出發 山吹村・檜原を経て七久保村(上伊那郡)の醫三石三春が家に宿す
- 五・五 出發 飯島・福岡・上穂を経て、外島村の飯島氏に宿す
- 六 光久寺の棠庵上人と語る
- 三 外島を立つ 殿村・松島を過ぎ宮木の宿に一宿す
- 二 小野より鹽尻へ 桔梗が原を経て本洗馬(東筑摩郡洗馬村)に入る。長興寺の洞月上人を訪ふ 滯留

- 二七 熊谷直堅・醫義親等と唱和す
- 二六 醫可兒永通を訪ふ
- 六・七 岩垂の岩垂氏を訪ひ一宿す
- 四 三溝隆喜が家に遊ぶ
- 二五 松本の醫師澤邊雲夢に消息す
- 七・二 淺間山爆發の音こゝに聞ゆ 八日更に烈し
- 九 二子村に行き某因信の家に宿す
- 二 本洗馬に還る
- 五 桔梗が原に遊ぶ
- 六 芦ノ田村鏡石見物
- 三〇 牛伏寺參詣
- 二五 松本に行く 鹽原村の某忠雄が家に宿す
- 洗馬村滯在

- 二六 百瀬村を経て本洗馬に還る
- 八・七 今井村の祠官梶原景富を訪ふ
- 三 本洗馬を立ち姨捨山の月を見に行く 野村・平田・松本・岡田・刈谷原を過ぎ會田の驛に宿る  
以下一九日まで「わがこゝろ」(眞)
- 四 太刀峠を越え、刈屋澤・青柳を経て麻績村に憩ひ 猿が馬場を越えて中原に泊る
- 五 姨捨山に登る 此夜明月
- 六 對馬の人難川清歳と逢ふ 稻荷山・鹽崎を経て善光寺に詣で門前の客舎に宿す
- 七 もとの路を還る 青柳に一泊す
- 八 淺間の温泉 自庵の湯に宿る
- 九 本洗馬歸着 紀州田邊の俳人香風(名は訓股)を伴ひ來る
- 九・三 飛驒一宮の祠官梶原家熊と逢ふ
- 九 常陸の人某宗淳と別る

- 一〇・二 鹽尻の阿禮神社に詣る
- 三 三宮砂田神社の御柱祭を見に行き和田村に一泊して還る
- 二・五 芦ノ田村若宮八幡社に詣る

天明四(一七八四) 三一歳

洲輪すわの海うみ

- 五・五 鹽尻峠を越えて 下諏訪へ往復す 春宮筒粥神事
- 三 今井村法輪寺に尊應法印を訪ひ一宿
- 三 松本に行く 某吉員・小松有隣の墓を弔ふ 江原村へ行く

一 現存する「諏訪の海」は、或は殘缺であるかと思はれる。是も隨筆「筆のまに／＼」の卷二に、本洗馬に來た次の年の三月酉の日に、諏訪祭を見物に行つたところが、折から花の眞盛りであつて、富士山の影は湖に映り、雪白々と水底まで霞むやうに見えた。其時の歌と記事は

「洲輪の海」といふ一巻になつて居るとあつて、今見るものには其條が無い。さうして二月以後の日記はまだ出て來ぬのである。

一 「菴の春秋」といふ一巻の成つたのはこの期間であつた、此書は五月節供過ぎを以て筆を止めて居る。洗馬の釜井菴に住んで居たことは、其文章からほゞ察せられる

同じ年

來目路乃橋(秋四、眞)

六・晦 本洗馬を立つ 松本を経て清水村 牛楯の瀨を見る 湯の原の白絲湯に宿す

七・一 備中玉島圓通寺の國仙和尚に逢ふ

三 薄町の薄社に詣で祠官上條氏を訪ふ 湯の原出發 松本に行き峨月坊の家に宿す 寶榮寺の儀辨上人 定儀・吉尋・吉退など訪ひ來る

九 淺間温泉に遊ぶ 某廣恵に逢ふ

二 倉科琴詩を訪ふ

三 松本を立つ 田澤村の里正某<sup>ともよし</sup>輩好が家に宿す

四 出發 熊村・細査村を経て穗高神社に詣づ 池田に泊る

五 相導寺村を経て「とあり」の橋を見に行く 再び池田に還る

六 宮本を経て大町 伊藤某が家に宿す

七 女犬原の峠を越え 更級郡日名・歌道・大原・穗刈 新町に三日泊る

八 上條村の鹽入某訪ひ來る

二〇 新町を立ち 水内村の久米路の橋を見る 田野口に泊る

三 長谷村を経て埴科郡に入り 下戸倉村に泊る

三 坂木の阪城神社・屋代の粟狭神社等に參り 松代に泊る

三 千曲川を渡り 氷<sup>ひまろ</sup>鉦村の善導寺に等阿上人を訪ふ 犀川を渡り 芋井の醫師山本晴慎が家に宿す

二四 善光寺に詣づ

二五 圓葉寺の悲氓上人を訪ふ 書家馬禪長と逢ふ

犀川に沿ひて

- 二天 戸隠神社参拜 中院の勸修院を訪ひ あたりの家に宿す
- 三モ 飯綱山の麓を過ぎ 軍陀利・揚屋・櫻を経て 越といふ處に泊る
- 四元 再び長野に来て 山本晴愼の家に宿す
- 五元 出發 三輪・押田・西條・田中・吉村・梶窪・平出・柏原を経て 野尻の驛に泊る
- 六三 熊阪村を過ぎ越後に入る 赤河・岡山・片具・二本木等を経て新井に泊る

一 八月初めから九月九日までに、越後を通過したことは明かだが、其間の紀行はまだ自分を見て居らぬ。秋田縣大館町の栗盛教育財團の所蔵本に、「高志葉」といふ一卷があると聞いて居る。紀行ではないかも知れぬが、是を見たならば多分通つた路筋ぐらゐは判るかと思ふ。「鄙の一曲」の民謡の中には、北蒲原郡のものが多く採集せられて居り、此郡には或は數日の滞在をしたかと思はれる。彌彦神社には必ず参拜するといふことが、信州の日記の中にも書いてあり、又柏崎のかうろぎ橋の事は、「筆のまにまに」巻六にも説かれて居るが、此點は傳聞かも知れない。秋田では越後の地理に詳しい橋本守(由之)といふ旅の學者と會談して居り、又丸山

氏の越後名寄は寫本で讀んで居るから、是等の知識には秋田に来て後に學んだものとも思はれる。たゞし岩船郡は蒲萄峠には掛らずに海府通りをしたことだけはほゞ確かなやうである。根屋の鈴楯の風景を説いた條が、「雪の道奥」といふ紀行にあるから、自分にはさう考へられる。

二

天明四年

鱒田濃刈寝(秋四)

- 九・一〇 出羽鼠ヶ關(山形縣西田川郡)に入る 小阪屋に宿す
- 九・二 小岩川の西光寺に天真上人を訪ふ
- 一五 出發 溫海・五十川・小鳩(小波渡)を経て 三瀬の宿に泊る
- 一六 中山・矢引・大谷・水澤 樺屋の良林寺に良瑞和尚を訪ひ宿す
- 一九 出發 大山を経て鶴が岡 七日町に宿とる

越後と眞澄



- 二〇 羽黒山參詣 三橋を経て手向村 文珠坊に宿す
- 二一 瀬川・狩川・古杉・廻館を経て 余目に宿す
- 二二 新堀にて最上川を渡り 酒田に入りて吹浦の關手形を乞ひ 新田目に泊る
- 二三 十日町を過ぎ 尾落伏村の永泉寺に宿す
- 二四 吹浦・女鹿の二關を過ぎ 三崎阪を越えて小佐川に宿す
- 二五 出發 川袋・關村を経て 鹽越(秋田縣由利郡)に泊る
- 二六 象潟一覽
- 二七 飛・金浦・海士剝を経て 本莊に至る
- 二八 朔 梅田・宮内・玉ノ池等を経て 瀧澤川を渡り 前郷村に泊る
- 二九 小菅野・山田・上條を経て 矢島に泊る 病氣
- 三〇 出發 伏見(川内村)に行き 川留めに遭ひ滯留す 大雪になる
- 三一 漸く川を越えて焼山越 たむろ澤といふ家三戸ある村に宿かる

- 二 西馬音内(雄勝郡)に出づ 雪の爲に滯在
- 元 出發 杉の宮より雄物川を渡り 柳田村の草薙氏に宿を乞ふ 勸められて爰に冬籠りをする
- 二・中旬 湯澤に往復す

天明五(一七八五) 三二歳

小野の古里(秋四)

- 正・朔 柳田村草薙氏にて年を迎ふ
- 四 湯澤の山田氏を訪ひ 東海林某に逢ふ
- 一〇 岩崎の石川氏を訪ひ宿す
- 一四 湯澤に還る
- 一七 柳田に行く
- 一九 再び湯澤へ

雄勝郡に入る

- 二五 新金谷村の高橋氏を訪ふ 湯澤長谷寺の万明禪師に見ゆ
- 二六 柳田村へ
- 二・三 湯澤へ
- 九 久保田(秋田市)の人某貞教・某宗信と逢ふ
- 一〇 岩崎へ 三四日ありて湯澤に還る
- 一七 柳田に行き草薙氏に宿す
- 二三 湯澤へ
- 二九 又柳田村へ
- 三・六 岩崎の石川氏に行く 杉澤を過ぎて
- 二四 湯澤に還る
- 二七 金谷村に行く
- 四・三 柳田村に行く

- 九 湯澤の山田氏へ 久保田の人眞崎北溟と逢ふ
- 三 醫師榎本氏英の家を訪ひ 市立のさまを見る
- 一四 小野村の小町舊蹟を訪ふ 歸路横堀にて某實諧といふ老人を訪ふ 院内に至る
- 一五 湯澤の山田氏に還る
- 一七 松井某の家を訪ふ
- 一八 柳田村へ暇乞に行く
- 二〇 貝澤を経て宮傳村みやでんに行き 東海林桃二の家に宿す 詩人佐々木某と逢ふ
- 二三 宮傳を立ちて新金谷村へ
- 二五 柳田村へ
- 二六 高橋某に伴なひ野遊す
- 二七 金谷へ
- 二九 湯澤に来て榎木氏に宿す

一 湯澤を出發したのは五月の初めであつたらう。是から八月初めまで、丸三箇月の日記が缺けて居る。この前既に二三の秋田城下の人々と交を結び、東道の主人を得るには苦しまなかつたと思ふ。松前渡航の計畫はあつたと見えて、秋田の間屋の紹介状を持つて居たことが、松前藩士の記録に見えて居るといふ。たゞ秋田に入る前、横手大曲その他の土地を、どうして通つたかゞ明かでないのである。十七年後に再び羽後に入つて來てからも、最初のうちは主として北部を巡り、南部の人々とは交遊が少なかつたらしく、其間に歳月が過ぎて舊い知人は居なくなつて居たものか、再會の記事は殆ど見られない。

同じ年

楚堵賀濱風(秋五)

八・三 陸奥の境 木蓮子阪を越え津輕に入る 關屋・大間越を経て黒崎に泊る(青森縣西津輕郡岩崎村)

四 的神・房田・濱中・岩崎・中山を過ぎ 深浦の湊に泊る

五 廣戸・追良瀨を経て龜木に泊る

六 風合瀨・田野澤・金井が澤・關・柳田・櫻澤を過ぎ 赤石川の岸の牛島といふ處 大雨に水出で、川渡り難く、こゝの小屋に泊る

七 金井が澤に引返して 小野某の家に宿す

八 再び牛島に至り赤石川を徒渉す 赤石を経て鯨ヶ澤の湊に泊る 病の爲に滞留す

九 卯之木・床前・森田・山田・相野・木造を経て 五所河原(北津輕郡)

一〇 菖蒲川・大相・小幡・板柳を過ぎ 藤崎(南津輕郡)の眞蓮寺に宿を乞ふ

一一 大久保・撫牛・堅田・和徳を経て弘前に入る 諏訪行宅の家を訪ひ宿す 神職山邊行徳と逢ふ

一二 間山祐眞・笹森建福等と唱和す

一三 土淵川を渡り 高屋繁樹が家を訪ひ宿る

一四 某行徳の家(まきのり)に宿し 中秋の月を見る

西津輕の海岸

- 二六 猿賀村の御社に詣で 黒石に至り 齋藤行素の家に宿る
- 二七 出發 野添・十川・三島・高館・竹鼻・本郷・吉内・中野等を経て 浪岡に泊る
- 二八 德才子・杉ノ澤等の村々を過ぎ 津輕阪を越え 油川・新城・岡町(東輕津郡)を経て青森に入る 烏頭うづかぶの宮に詣で、蝦夷渡海の日を卜す 三年を待てと示さる
- 二九 出發 途に地遁げの群衆に逢ひて引返し 再び浪岡の前夜の宿に泊る
- 三〇 前路を過ぎて 尾上・小和杜・柏木町・吹上より 薬師堂(南津輕郡石川町)に至り宿す
- 三一 乳井にゅうい・鯖石を経て大路に出で 大鰐・藏館より碓が關
- 三二 村長に關手形をもらひ 矢立峠を越え 秋田領に入る 陣場・關屋を過ぎ長走(北秋田郡矢立村)に宿る
- 三三 白澤しらかば・釋迦内しやかないより大館を経て 米白川 火災直後の扇田の町に泊る
- 三四 雨中出發 大瀧を経て十二所の關を越え、澤尻といふ山中の村に宿す 雨の爲に

滞留す こゝは奥州(鹿角郡)との境

二天 鹿角郡に入る 川に渡舟を得ずて 新田しんたといふ村に泊る

同じ年

けふのせばのゝ(秋二)

八・二七 古川村に錦木塚の故事を訊ね 花輪を過ぎて 大里の作山某が家に宿す 病の爲に滞在す。村長菊池某訪ひ來る

九・朔 大徳寺の僧惠音を訪ふ

二 出發 小豆澤の大日堂に詣で 湯瀬の湯に浴し一宿す

三 齋田・兄畑・佐比内を経て 折壁の關所を過ぎ 田山の吉澤某の家に泊る

四 苗代澤から梨木峠 曲田村まがたに泊る(二戸郡)

五 保登澤・石神・中齋・駒が嶽 淨法寺村の福藏寺に活龍上人と語る 更に石淵・岡本を経て桂清水の觀音を拜し 金葛村に宿を借る

六 筑館・十日市・中澤・一戸 末の松山浪打峠を見に行く 一戸より栖穴・白子阪など南部領に入る

を経て 小澤の樵夫の家に宿す

七 高屋敷・笹目子・小繫・日行を経て中山宿 府金・かいらぎ・沼宮内に泊る(岩手郡)

八 卷堀の金精神 遊民を過ぎ 盛岡に入る 北上川の邊に宿かる

九 十日市町・郡山・日詰・櫻町 石鳥谷に一泊(紫波郡)

一〇 八幡・官部 花巻の醫伊藤修すけしの家に宿す 楳正唯・岩波良清といふ二人の遊歴文人と逢ふ(稗貫郡)

一七 夜花巻大火 伊藤が家も焼けたり 假小屋の内に數日を送る 村谷守中綿衣を贈る

二七 出發 扇堀まで人々送り來る 十二町目を過ぎ和賀郡に入る 成田・岩谷堂・二子黒澤尻の昆某こんの家に宿す

三〇・朔 出發 北上川を渡り橋(立花)村・門岡村 江刺郡に入り片岡といふ處に宿かる

一 是から後の丸一年間の日記が缺けて居る。或はこの間に仙臺方面の旅行をしたかとも想像せられるが、自分はなほ眞野萱原の薄の穂の包紙の文字などによつて、それはもう一年後の天明七年秋のことだらうと思つて居る。恐らくはやはり花巻一ノ關の間を歩き巡つて居て、次々に出て來るやうな多くの知友を作つたもので、六日入鈴木家などの日記類をよく調べたならば、其證據が出て來ようかと思ふ。

一 「南六」とあるのは南部叢書卷六の載録せられて居ることを示す。以下同じ。

三

天明六(一七八六) 三三三歳

雪乃膽澤邊(秋五、南六)

一〇・朔 奥州山目ノ村(岩手縣西磐井郡)の大槻氏に在り 主人は大槻清雄 一家皆和歌を能くす

二〇 衣川(膽澤郡)に行く 前澤に宿す 主は某盛方もりまさ 仙臺領に入る

- 三 徳岡の村上良知が家に行き宿す
- 三 水澤を経て八幡村 畑中某が家に宿す
- 四 水澤に出で 某信包を訪ふ 夕になりて某良道が家に宿す
- 五 前澤の盛方が家に宿る
- 六 同じ地の某正保が家に行く
- 七 衣川村を経て山ノ目に還る
- 八 中尊寺参詣 秀衡六百回忌展
- 九 前澤に行く
- 閏一・朔 同處某高尙が家に宿す
- 三 六日入(白山村)の鈴木常雄が家に行く 滞在
- 二・朔 冬至
- 三 山居に行き蜂屋氏を訪ふ 更に姉體村の安彦中和の家に行き宿す

- 七 中野(眞城村)の某氏に宿す
- 八 大雪 姉體村の佐々木氏に行き滞留す
- 四 蜂屋氏に行く
- 五 姉體に歸る

一 この日記には序文が無く年次が知れないが、この十二月が秀衡の六百年忌に當るといひ、又十月に閏が有つたことによつて、天明六年たることは明かである。水澤・前澤を中心とした生活だったので、「雪の膽澤邊」といふ書名は設けたのであらうが、この後又再び磐井郡へ戻つて居る。さうして四月ほど日記が缺けて居る。

天明七(一七八七) 三四歳

配志和乃若葉(秋五、南六)

- 四・一 前月來東磐井郡大原に滞在す 芳賀長左衛門慶明が家に寓す
- 六 松井の瀧見物 その前日は花見

膽澤郡の村々

- 七 大原を立つ 猿澤村の觀福寺に立寄り 田河津の某爲信が家に至る
- 八 黒石(江刺郡)の正法寺に詣で 川を渡りて六日入の鈴木氏へ
- 九 前澤の靈桃寺より 衣川村を経て中尊寺 猿樂あり 平泉村の民家に宿す
- 一〇 五串の瀧を見に行く 山ノ目の大槻氏に宿す 滯留
- 一一 六日入の鈴木氏に行く
- 一二 水澤に行き鹽竈社の花を見る 大林寺の曇華上人を訪れ宿す 滯在
- 一三 附近の村の古風の婚姻式を見に行く 水澤に還り 某祥尙が家に宿す 滯在
- 一四 小幡爲香訪ひ來る
- 一五 鹽竈の社司佐々木繁智の家に行く 水澤を立ちて徳岡の村上氏に至り滯留す
- 一六 二 出發 前澤の靈桃寺に宿す
- 一七 那須資福の家の牡丹を見る
- 一八 某良友の家に宿す

- 一九 送別の歌會を終りて六日入に行き 川を渡りて黒石の某行道の家に宿す
- 二〇 六日入の鈴木氏に宿す 滯在
- 二一 前澤の杉ノ目眞門が家に至る
- 二二 六日入に還る 梅雨連日
- 二三 麻生の千葉道利に招かれて行く 再び六日入に還る
- 二四 隣村の杉ノ目眞種の家<sup>に</sup>招かれ一泊
- 二五 六日入出發 姉體の安彦中和の家に行き滯在す
- 二六 出發 黒石の正法寺に詣で 田河津に至り 一宿す
- 二七 猿澤村の中津山忠<sup>たかし</sup>の家に行き宿る
- 二八 大原の芳賀氏に至り滯留す
- 二九 室根山に遊ぶ
- 三〇 小林村良善院の清隆法師を訪ひて 又大原にかへる

一 この日記の序文には、天明八年戊申六月二十九日菅江眞澄とあるが、是は老後整理の際の誤記と思はれる。天明八年は松前渡航の年で、その六月中旬には既に贈澤を發足し、二十九日はちやうど盛岡に泊つて居るからである。尤も是を天明六年の春の日記と見ることも、まだ明確な反證は無いのだが、編中の人も家も多くは舊知で、新たに交を結んだといふのが少ないから七年であらう。

一 卷末六月晦日には再び東磐井郡に引返して來て居る。多分この足で本吉牡鹿の方へ向つたので、松島遊覧はこの年の名月の頃だつたかと思はれる。歌は傳はつて居るが日記はまだ出現しない。「月の松島」といふ一著があつたといふのも噂ばかりである。

天明八（一七八八） 三五歳

霞む駒形（秋五、南六）

正・朔 贈澤郡徳岡の村上氏に在りて年を迎ふ 主人名は良知 弟は良道 又某道遠といふ者あり 共に歌をよむ

- 二 田河津（東磐井郡）の爲信より音信あり
- 三 平泉（西磐井郡）常行堂の摩多羅神祭を見に行く 千葉某の家に宿す
- 四 達谷村の山王窟を見に行く
- 五 千葉氏を辭して徳岡に還る 途次前澤の靈桃寺を訪ふ
- 六 六日入の鈴木常雄が家に行く
- 七 徳岡の村上氏に還る 月末まで爰に在り

同じ年

岩手の山（秋五、南六）

- 六・五 前澤を立つ 送別の歌を贈る者 靈桃寺文英上人・安平廣影・高橋久武など 先づ六日入の鈴木氏に行く
- 八 水澤に行き 鹽竈社の佐々木氏に宿す
- 三〇 大林寺に宿す 曇華上人は同郷といふ  
北地の旅に上る



三 畑中某が家に宿す

三 北上川を渡り 岩谷堂(江刺郡)の大和田氏を訪ふ 前澤の福地某と爰に逢ふ

二 出發 倉澤・三照・下門岡を経て柵木村の村長及川胤修が家に宿す

二 ころを立ち 南部領黒岩より川を渡り 二子を経て花巻に入り 舊知伊藤氏が家に宿す

二 晴山・宮の目を過ぎ 石鳥谷に泊る

二 郡山より盛岡 檢斷の宿に泊る 大阪生れの旅藝人鬼吉と道連れになる

二 元 澁民に泊る

七・朔 卷堀・芋田・川口 巡檢使を迎ふとて道路修理す 是れ古河古松軒の参加せし一行なり 沼宮内・かいらげ・府金を過ぎ 御堂村の正覺院に一泊す

二 中山・小島谷から一戸(二戸郡)に泊る

三 末の松山・福岡・金田一・小野・川口・釜の澤を過ぎ 三戸(青森縣三戸郡)に泊る

四 浅水・五戸を経て相阪に泊る

五 三木木平・七戸 坪村の千曳明神に詣つ 清水目・久田を経て野邊地に至る

一 「千引の石」といふ著書があるといふことが、後年の「游遇濃冬隱」の中に見えて居る。千曳村を通つたのは、この七月五日の日だけだから、それは紀行では無くたゞ吟詠などを録したものであらう。

同じ年

率土が濱づたひ(秋六)

七・六 馬門の關を越えて津輕領に入る 狩場澤・口廣・清水川 小湊にて關手形を取り

土屋浦の關に其手形を檢めらる 榊木阪を降りて淺蟲の湯に泊る

七 とうまへの掛橋見物 野内・茶屋町・青森も過ぎて 大濱(東津輕郡・油川)に泊る 雨風の爲に滞在す

九 十三森・田澤・夏井田・瀬戸子・蓬田・蟹田を経て 野田に泊る

津輕領に入る

- 一〇 根岸・平館・宇田・奥平部・母衣月・今別を経て 松が崎に泊る
- 一一 早朝に三厩の浦に著く 算用師・竈の澤などを過ぎ 上宇織に行きて渡海の便船を求む
- 一二 この夜便船ありて乗る 追手強く吹き 翌朝未明に松前の湊に到着す

四

寛政元(一七八九) 三六歳

蝦夷喧辭辯二卷(秋五)

- 四・一九 福山に在り 明日巡歴の旅に出んとして エケブの下國季豊の家に送別の會あり 松前家の文子の方より消息あり
- 二〇 出立 同行者僧超山 出羽村山郡の人 ネブタを過ぎサツマエ村の村長太郎左衛門の家に憩ふ 赤神・雨垂・石浦の館・きよべを経て エラマチの喜兵衛が家に一泊
- 二一 泉龍院の文龍上人 チイサコの浦まで同行す おこしべ・深澤・原口を経て チイ

サゴの浦の織田善四郎が家に宿る

- 二二 蝦夷の父子を案内にして 白毫石・石崎・羽根差・潮吹・岐乃古村を過ぎ 上國(勝山)の上國寺に松逕上人を訪ひて宿す
- 二三 午後出發 メナを経て江差に入る 滞留 法華寺の日正上人を訪ふ 甲州の人
- 二四 江差の町を見物す 正覺院の諦觀和尚を訪ひ宿す
- 二五 使船ありて乗る 葦寒・乙部・水屋・蚊柱 相沼の浦に假泊す 漁家に宿を借る
- 二六 早朝に再び乗船 熊石・イナオ崎の前を過ぐ この崎から蝦夷地なり クドフの運上屋に宿す
- 二七 太田まで便船 太田上陸 海岸を見めぐり又山に登り 太田の運上屋に遵る
- 二八 一 帆越ごえをして歸途に着く 相泊より宇多づたひに 小宇多・アトロシを経て クドフの運上屋に來て泊る
- 二九 クドフを立ち ひかた泊・湯の尻 レンガイウダ・小川尻 ウシジリにて蝦夷の長松前に上陸す

- と語る ヒラダナイの小家に泊る
- 四 山奥のウシジリの温泉に入り 湯小屋に泊る
  - 五 再びヒラダナイに還りて泊る
  - 七 超山法師と分れて 海沿ひの路を還る 二人の修行者と道連れになる 熊石に着き 寺島某が家に宿す
  - 八 門昌菴に實山上人を訪ふ 常陸多賀郡の人なり
  - 九 雨中に熊石を立つ 辛うじてケニウチに着きて 杉村某が納屋に宿を借る
  - 二 出發 泊川・相沼のあたりまで来て喚び返さる 雨に川々溢れたれば滞留す
  - 一七 風を引きて寝る 更に二十三日まで このケニウチに止まる
  - 二四 曉に便船ありて乗り 蚊柱の浦に上陸して濱をあるく 水屋の浦の阿部七郎兵衛が家に入りて此日は寝る
  - 二五 小舟を雇ひてトツフの濱、コモナイに上陸して泊る

- 二六 タテ・會泊を経て 乙部の津鼻といふ處に泊る
- 二六 五輪澤を過ぎ 妻の湯に二宿す
- 六・朔 こゝを立ちアシサブ河を渡り 伏木野・泊を経て江差に著く 正覺院に宿す 再び超山に會ふ

- 四 法華寺に移る
- 六 江差出發 五勝手・メナ(北村)を過ぎ 上國の上國寺に入る
- 二〇 上國を立ち 安在の濱よりキノコ浦に來て泊る
- 二 舟にて爰を出づ 海荒れたれば名も知らぬ濱に上り 馬方に扶けられて、チイサコの浦に來て宿す
- 二三 山路を越えて原口の浦に 藤左衛門といふ者の家に泊る
- 二四 又山を超えてエラマチに至る 福山の寺澤某 御鷹取りに來たると同宿す
- 二五 泉龍院に招かれて宿す

- 二 元 エラマチ出發 病起りてサツマイに二泊す
- 三 漸く福山に還る エケフの下國氏の家に入る

一 この日記を寛政二年のものと思つて居たが、六月六日の條、江差と上ノ國との間に於て、國後蝦夷の叛亂を報ずる早馬の使に逢うた記事がある上は、寛政元年にちがひないと、高倉新一郎氏は考證せられた。それが正しいと思ふので前説を訂正する。高倉氏の詳しい研究は、秋田北盟寮香蘭會の會誌、「香蘭」第五號(昭和一二・六)に載せられて、菅江眞澄と北海道との關係はよほど明かになつた。松風夷談といふ書物にもこの人の事が出て居るといふが、残念ながらまだ讀んで見る折が無い。

一 蝦夷喧嘩辯は「えみしのさへぎ」と訓むので、國字で題せられた同名の書に續き、上下二卷をなすものと思はれるが、今までの書目には往々別書として取扱はれて居る。次に掲げる智誌磨濃膽組も、やはり「ちしまのいそ」と上下一續きの日記であることを、心付かずに居る人があつたやうである。

同じ年

昆布刈(秋五)

- 一〇・二七 某地の運上屋を朝立ちて 海岸を行く 辨財間・川尻・齋藤間・水無し・しづかうた・よもぎない・セクライを過ぎ山中の路を越ゆ 運荷川を渡り 石崎に至る
- 一八 病の爲に滞在
- 一九 石倉から錢神澤 蛭子氏に止まる 其後龜田・有川・函館に遊びて日を経たり
- 二〇・二四 雪中に函館を立つ 七重濱を経て ベケレベツに至り宿す
- 二五 モンベツ・トッフベツを過ぎ 三石に泊る
- 二六 キコウナイを経て シリウチ村に泊る
- 二七 路踏みを案内にして 雪の山路を越ゆ 湯の平の湯小屋に下りて一宿
- 二八 再び雪深き峠を越え 暮に福山に着く

一 この日記はもと上下二卷で、上卷が散逸したものであらう。「ひろめの具」といふ寫生圖